ハンドボール「第48号目次」

昭和42年11月号



（注）時評と思いつくままは本号休載

**表紙写真**　日独国際親善ハンドボール最終戦・全日本—西ドイツ
全日本は圧倒的な強みを見せ多彩な攻撃で一方的に西ドイツを破った。
（9月27日・駒沢体育館で）

# 私のことば

## 異なるルール解釈を正せ

西ドイツ選手団監督　ヘルム・トルカ（談）

われわれ西ドイツのハンドボール関係者は、交流のたびに腕をあげていく日本チームの力に驚嘆していました。今回、幸運にも日本を訪れることが出来、日本ハンドボール界の実情を直接見聞することができたのは、まことに得がたい経験であったと同時に、日本チームの進歩の秘密を知ることが出来ました。

情熱的な指導者、研究熱心な選手、礼儀正しい観衆、積極的な報道関係者……。われわれは今度の来日で訪れた各地で例外なくこうした人々に出会いました。

ハンドボールが発展するためには、いくつかの力が合わされなければなりません。日本がこのような努力と態度をつづけるかぎり、必ずや世界でも有数のハンドボール国を完成することができると思います。

日本のレベルをどう思うか——これは今回もっとも多くの人々からたずねられたものでした。卒直にいって私は日本の、特に男子のレベルがこれほど高くなっているとは思いませんでした。その秀れた脚力を活かしたスピードのある攻撃は、もっとも近代的な戦法であると思います。

また、いかにしたら片手でボールを操作することができるかという質問もよくうけましたが、これは握力と手首を強くする以外にありません。西ドイツ選手はもちろん、ヨーロッパ選手も徹底して指の力を強める練習をしているだけで、他にひみつはありません。

日本ハンドボール界に与える言葉ということですが、何よりいちばん感じたことはルール解釈の食いちがいです。ヨーロッパと日本が遠隔の地であるからといってこれはすまされるものではなく、選手たちもこれには同意見でした。

大会を運営していく上のローカル・ルール（例えばヨーロッパ各国はほとんど前・後半サイドの交替と同時に選手席も代わります）はさしつかえない範囲で遠征チームはホームチームにしたがいますが、競技の正常な進行のためのルールは世界のどこへ行っても同じでなければなりません。もっともストーリングなど国際的にも統一見解がとれぬ問題は少くないのですが……。

苦言をもう一つ。男女とも体格の差をカバーしようとするせいかラフなプレーが見られたのは残念です。ラフ・プレーは国際的な流行と思いますが、日本がそうした風潮に染まりつつあることは遺憾です。

われわれは母国に帰って、ゆっくりと日本遠征の楽しい思い出をふり返ろうと思っていますが、どうか日本の皆さんも今回の交流を何時までも忘れないで下さい。スポーツというものはそうしたものなのですし、これほど美しい結びつきは他にないものです。日本ハンドボール界の発展と皆さまの御多幸を祈りつつ……。（文責・編集部。この一文はトルカ氏の来日中の談話をまとめたものです）

# 日本の善戦、五輪へ希望の光

## ～日独国際試合、成功裡に終る～

## 多大の教訓と感銘与えた西ドイツ

日本ハンドボール協会がミュンヘン・オリンピックへの強化策第一歩として招待した西ドイツ男女選抜チームは、9月9日から全国各地を転戦、9月27日東京での全日本(男女)との対戦をもって男子13試合、女子11試合の全日程をとどこりなく終了、男子10勝3敗、女子6勝5敗の成績を残した。西ドイツ選抜チームは風土の違い、強行日程にもかかわらずさすがにハンドボール発祥の国の代表にふさわしい華麗でフエアなチームプレーを展開、日本ハンドボール界に大きな感銘と教訓を与えた。

特に、男子の豪快な攻撃と巧妙なポストプレー、女子のち密なセットオフエンスは日本の指導者やプレイヤーの賞讃の的となった。個人では、男子ではメンダッハ、イバース、ヒルマーグルンワルド、デュエル(GK)、女子ではミューラー、ミルター、ロイター、ホイヤー(GK)らヨーロッパのトップ プレイヤーが定評通りの巧技と斗志を示し、本場の ナショナル プレイヤーが、いかに心・技・体を揃えたものであるかを遺憾なく発揮した。

一方、日本側各チームもレベル向上をはっきりと裏づける善戦ぶりで、なかでも男子の3勝(全芝浦工大、全立大、全日本)は完全に西ドイツを上廻る力を示し球界の前途に大きな希望の灯をともした。女子は、実業団の単独4チームが勝ち星をあげた。その充実は大書してよいものがあろう。

本誌では、前号につづき、このシリーズの後半戦（男子第8戦、女子第7戦以降）の熱戦譜を集めて全国のファンにお伝えするが、交流のたびに意義深い足跡を残してくれる西ドイツハンドボール界に改めて多大な感謝の意を表したいと思う。

### 第8戦

### 西ドイツ、後半に本領

#### 前半善戦の菊松会及ばず

男子第8戦は9月19日午後6時30分から広島県立体育館で菊松会が対戦。主審・丸口哲美、副審・藤賀克昭、荒谷拓三＝観衆約二千

西ドイツ 17（8−7, 9−3）10 菊松会

【菊松】

| | 得 | |
|---|---|---|
| GK | 0 | 石田 |
| GK | 0 | 藤山 |
| FP | 0 | 峠野 |
| FP | 5 | 市原 |
| FP | 0 | 村瀬 |
| FP | 0 | 西元 |
| FP | 0 | 佐伯 |
| FP | 2 | 東 |
| FP | 3 | 上田 |
| FP | 0 | 柏原 |
| FP | 0 | 田中 |
| FP | 0 | 河野 |
| | 10 | 7MT（2） |

【西ドイツ】

| 得 | | |
|---|---|---|
| 0 | デュエル | GK |
| 0 | ケッセマイヤー | GK |
| 0 | グルンワルド | FP |
| 4 | メンダッハ | FP |
| 2 | パール | FP |
| 1 | トルカ | FP |
| 1 | ゴルゲス | FP |
| 4 | イバース | FP |
| 0 | クレム | FP |
| 1 | オーネン | FP |
| 2 | バーテル | FP |
| 2 | ヒルマー | FP |
| 17 | （2） | 7MT |

【FPその他の出場者】▽菊松会尾上、重本ともに得0

**技術評**

西ドイツは立ちあがり1分パール、2分イバースとポストからのシュートをしたが菊松会GK石田のファインプレーに狙まれ、得点ならず、一方の菊松会も市原得意のロングシュートが決まらず、互角のスタートであった。しかし、西ドイツは4分メンダッハが、相手ディフェンスの壁を突破する強力なロングで先取点をあげ、更に5分にはヒルマーのシュートで2点目。

しかし菊松会は8分に両サイドのゆさぶりから、上田がうまいサイド30度からシュートを決め、更に菊松会のエース市原がフェイント気味にスタンディングシュートを決めて3対2と追った。

その後は西ドイツはラフプレーが目立ち決定的な得点を上げることができず、菊松会も市原のロングシュート、サイドからの上田のシュートもあったが、ゴールキーパーの好守備に阻止された。

ようやく20分には上田のサイドからの切込みから7Mスローを得更に上田は巧妙な両サイドからのシュートを決め、前半戦はよく食い下った。

しかし、西ドイツは後半にはいると持ち味の速いパスで菊松会の守りをゆさぶり、イバースのポストプレーを生かし、連続的にゴールを決めて、一気に菊松会を突き放した。

西ドイツは一線防禦の態勢から市原のロングシュートを完全にカットし、切り込みには両手をひろげ素晴らしい、ツメで相手のダッシュをストップした。後半20分西ドイツは速いパスから、トルカの見事なシュートを決めた。

この攻撃でみせたスピードに乗ったボール処理は菊松会の防禦陣に全く余裕を与えなかった。

これに対抗するごとく菊松会もローリングから市原のシュートを決めたのは賞賛に価する。

いかんせん体力差は試合に大きなハンデイキャップとなった。正確なパスワーク、シュートの強力さ、特に肩、手首が強く、ボールを完全に握るのでスピード、コントロールとも日本選手と格段の相違があった。【山本豊照・広島協会理事】

### 第9戦

### 全京大、前半の健斗むなし

#### 消極的な攻め示す西ドイツ

男子第9戦は21日午後6時30分から京都市体育館で全京大が対戦主審・小西博喜（京都学芸大出）副審・吉田博二、福井喜昭＝観衆約二千

西ドイツ 19（10−11, 9−2）13 全京大

## 今シリーズ総成績

**【男　子】**

| No. | 月日 | 場所 | 勝敗 | 西独 | 前半・後半 | 相手 | 対戦相手 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 9.9 | 東京 | ●西独 | 19 | 10―15 / 9―11 | 26 | 全芝工大 |
| ② | 9.11 | 横浜 | ●西独 | 11 | 5―13 / 6―11 | 24 | 全立教大 |
| ③ | 9.13 | 盛岡 | ○西独 | 23 | 9―12 / 14―9 | 21 | 東日本選抜 |
| ④ | 9.14 | 仙台 | ○西独 | 33 | 17―4 / 16―12 | 16 | 全仙台 |
| ⑤ | 9.15 | 東京 | ○西独 | 18 | 8―7 / 10―8 | 15 | 大崎電気 |
| ⑥ | 9.16 | 東京 | ○西独 | 20 | 6―4 / 14―8 | 12 | 中大 |
| ⑦ | 9.17 | 東京 | ○西独 | 17 | 6―5 / 11―2 | 7 | 全早大 |
| ⑧ | 9.19 | 広島 | ○西独 | 17 | ―― | 10 | 菊松会 |
| ⑨ | 9.21 | 京都 | ○西独 | 19 | ―― | 13 | 全京大 |
| ⑩ | 9.23 | 大阪 | ○西独 | 14 | ―― | 10 | 大阪イーグルス |
| ⑪ | 9.24 | 静岡 | ○西独 | 19 | ―― | 11 | 全静岡 |
| ⑫ | 9.25 | 東京 | ○西独 | 24 | ―― | 16 | 桜友会 |
| ⑬ | 9.27 | 東京 | ●西独 | 13 | ―― | 23 | 全日本 |

**【女　子】**

| No. | 月日 | 場所 | 勝敗 | 西独 | 前半・後半 | 相手 | 対戦相手 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 9.9 | 東京 | ○西独 | 7 | 4―0 / 3―6 | 6 | 大崎電気 |
| ② | 9.11 | 横浜 | ●西独 | 9 | 5―6 / 4―5 | 11 | 三菱鉛筆 |
| ③ | 9.13 | 盛岡 | ○西独 | 9 | 4―3 / 5―5 | 8 | 東日本選抜 |
| ④ | 9.15 | 東京 | ●西独 | 11 | 6―6 / 5―6 | 12 | 大崎電気 |
| ⑤ | 9.16 | 東京 | ○西独 | 12 | 7―6 / 5―3 | 9 | 東京重機 |
| ⑥ | 9.17 | 名古屋 | ●西独 | 7 | 4―8 / 3―4 | 12 | 愛知紡 |
| ⑦ | 9.19 | 津 | ●西独 | 11 | ―― | 17 | 田村紡 |
| ⑧ | 9.21 | 熊本 | ○西独 | 13 | ―― | 10 | 大洋デパート |
| ⑨ | 9.23 | 大阪 | ○西独 | 9 | ―― | 8 | 全大阪 |
| ⑩ | 9.24 | 静岡 | ○西独 | 13 | ―― | 4 | 全静岡高校選抜 |
| ⑪ | 9.27 | 東京 | ●西独 | 7 | ―― | 8 | 全日本 |

| 得 | 【全京大】 | | | 【西ドイツ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 本田（OB） | GK | GK | ケッセマイヤー | 0 |
| 0 | 伊賀（3年） | GK | GK | デュエル | 0 |
| 0 | 川野（OB） | FP | FP | グルンワルド | 6 |
| 2 | 浅野（OB） | FP | FP | メンダッハ | 4 |
| 3 | 山口（4年） | FP | FP | パール | 1 |
| 1 | 岡本（1年） | FP | FP | トルカ | 0 |
| 5 | 竹口（OB） | FP | FP | ゴルゲス | 0 |
| 2 | 市橋（OB） | FP | FP | グッシエル | 1 |
| 0 | 川島（3年） | FP | FP | イバース | 1 |
| 0 | 今安（4年） | FP | FP | クレム | 2 |
| 0 | 藤森（1年） | FP | FP | バーテル | 1 |
| 0 | 安達（0B） | FP | FP | ヒルマー | 3 |
| 13 | （3） | 7MT | 7MT | （5） | 19 |

【FPその他の出場者】▽全京大　日下部（2年）、桑山（OB）＝得0　▽西ドイツ　オーネン得0

**記者の目**

試合は西ドイツペースで進んだが全京大も追いかけ5―9の劣勢から前半24分9―9とタイ。さらに全京大は2点をあげて逆に主導権を奪い前半を終った。

しかし後半になると西ドイツはこまかい動きとメンダッハをはじめ長身選手の強引なシュートで得点をあげ、守っても疲れのみえた全京大を2点に封じて押し切った。

技術的にはこの試合に関する限り西ドイツから学ぶものは何もなかったというのが関係者の一致した評であった。スタンドを埋めた観衆は大半がハンドボール経験者であったが試合の途中、観衆のなかから聞かれたのは、かっての西ドイツとの試合と異り、西ドイツのプレーに対する賞讃よりも、むしろ善戦する全京大に対する声援だった。

しかも前半1点をリードした全京大の主力は今春の関西学生1部の最下位だった現役である。

ところで西独と対戦した全京大が国立大学の選手およびOBの単独チームだったことは、ハンドボール界にとってきわめて意義のあることであった。

京大は数年前、関西リーグで優勝するなど活躍が目立っていたが、京大の運動部としても単独の国際試合は70年の歴史で初のことだということであり、21日の試合は京大ハンドボール部が学内で伝統あるラグビー部やサッカー部と肩を並べる地位を確保するに十分な快挙であった。10年程前までは11人の選手を揃えるのにも苦労していたチームが国際試合をおこなうまでに成長したことは喜ばしいことであり、同環境の他の国立大学ハンドボール部の大きな刺激になったのではないかと思われる。京大ハンドボール部の今回の国際試合の結果が沈滞気味の同大学の運動部の刺激となり、他の運動部を奮起させることができるなら、その意義は大きなものであったと考える。（奥田良胤・NHK報道部・京大OB）

**技術評**

西ドイツは前半ゆるいテンポでボールをまわしながら10分5―1とリード。全京大も左右のゆさぶりから竹口を中心に山口、市橋が得点、24分には9―9に追いついた。

さらに全京大は前半27分、29分にも竹口がパスと見せかけたサイド・シュートで連続得点し、場内を湧かせた。

特にフェイントからのシュートがよく決り、西独の帰陣も遅かったため速攻でも得点をあげ、粘り強いプレーで前半終了時には11―10と逆転する健闘を見せた。

西独の攻撃は、サイドからサイドへのロングパスからチャンスを見てポストへボールを送っていた。この攻撃も全京大デフェンスの甘さと、西独選手に比べて体力的に見劣りする選手が多いのと、特に身長のなさが大いにてつだっていたように思われる。それにしてもメンダッハのジャンプシュートは、彼がジャンプするとデフェンスのはるか上方を通過し、ほぼノーマークと同じ状態になり、ほとんど得点が決った。確かにメンダッハがシュートすると全部のシュートが入ってしまうような気がするが、ゴールのコーナーにピシッと決るシャープなシュートは見られなかった。対芝浦工大戦に見せたゴールのコーナーいっぱいに決るスタンディングシュートが見られなかったのは残念であった。

全京大は後半疲労が出て、攻撃のスピードが落ちると、体の大きいデフェンスに対して単調なパスワークだけでどうにも攻められなかった。全京大のように超ロングヒッターのいないチームでは、速攻などスピードのある攻めをしなければ得点をあげることは不可能だ。速攻も単発的で、つぶされるとシュートにならず、西独の馬力に押し切られてしまった。

西独は前半よくボールをまわし

てポストを使い。パスはよく通っていたが、キャッチミスやラインクロスも多く、もう一つ「これはすごい」というプレーはなかった。また完全にボールを握っているもののそれを生かしたトリックプレー、トリックパスもなかったし、シュートもポストもポストシュートをはずしたりして、どことなく鋭さがなかった。やや予想外であったといえる。戦術的にはメンダッハやグリュンバルドがボールをまわすだけで幾度かチャンスがあってもロングシュートをしなかったのは不思議であった。それに比べて全京大の竹口・山口が少ないチャンスにロングシュートを決めていたのとは対称的であった。しかし、グリュンバルドの手首のきいたスピードある7Mスローはすごい!という感じをうけた。今一つ残念なことは、西独でも超一流のキーパーであるデュエルが病気欠場したことである。矢張りケッセマイヤーでは国際試合としてものたりなかった。

芝浦工大戦に最も強く感じたことだが、日本のハンドボールの特徴は西独には見られないプレーの機敏さという点である。ボールまわしからのフォーメーションにしても、西独はボールだけがまわって、スピード感が感じられないのに対して、日本の動きはその一つ一つがよしあしは別にして何となく流れがあって、一つのリズミカルさを感じた。日本が体力的に〝小さい〟というハンデイを補うためには、〝走り〟以外にはないだろうが、この補っている部分が補う意味以上に日本の長所となっているように思う。

全京大が善戦した理由の一つに、全京大の捨て身的な思い切ったプレーの続出だったこと。それと西独が身長も充分で、スピードもあり、文句なく入るケースでもシュートをちゆうちよしてポストにパスし、それがミスをよんで反撃されるといった点が多かったことである。

それは彼等が西～北欧での試合では、ロングシュートもあれほど余裕をもって打つことはできないのであろう。故により正確なポストプレーをねらい、それを中心にして練習をつんでいるためだと思う。日本へ来てかりにシュートを打てるチャンスがあっても、矢張りいつもやっていないプレーはすぐにはむずかしいのであろう。

それを証明しているのはメンダッハのロングシュートであり、日本に於ける試合でも何も気にかけないように数多くのシュートをし、毎試合多得点をあげていたことである。全京大の健闘を賞しておきたい(小西博喜・京都協会理事)

## 第10戦

# イーグルス、追いつけず

## 体格差と守り疲れが敗因

男子第10戦は23日午後3時30分から大阪府立体育会館で大阪イーグルスが対戦。主審・丸岡一清、副審・木村靖弘、鷹見陽平

西ドイツ 14 (8－4 / 6－6) 10 大阪イーグルス

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【大阪】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ケッセマイヤー | GK | 島崎 | 0 |
| 0 | デュエル | GK | | |
| 0 | バーテル | FP | 加藤 | 0 |
| 3 | メンダッハ | FP | 青木 | 1 |
| 2 | パール | FP | 松尾 | 1 |
| 0 | ゴルゲス | FP | 東 | 4 |
| 1 | グッシエル | FP | 北岡 | 3 |
| 1 | グルンワルド | FP | 井上 | 1 |
| 6 | イバース | FP | 山崎 | 0 |
| 1 | ヒルマー | | | |
| 0 | ハルトビッヒ | | | |
| 14 | (3) | 7MT | (0) | 10 |

**技術評**

大阪イーグルスの敗因は体格差と守り疲れで速攻が出なかったところにあった。

西ドイツが来日第1、第2戦に敗れた最大因は、試合開始そうそうの素晴しい日本の速攻にリードを奪われ、自らのペースを乱し、持てる力を発揮できなかったことにあった。

大阪イーグルスは日本の対戦チームの内で一番小柄でこの体格差がどんな結果となってプレーの上に現われるか又彼等のスピードあるプレーを何処迄守りきり速攻で先行来るかがこのゲームの焦点であった。彼等は二戦以後日本のゲームにも馴れ相手によっては力をセーブしたり、リードすれば遊ぶプレーをし、勝ち続け自信をつけてきた。然しイーグルスには対戦前日よりゲームに対し意慾的であった。イーグルスも教員の優勝チームとして何とか一矢を報いるべく斗志を燃やした。然し彼等は予想通りボールを握り正確なハンドリングと45度のフリースローライン付近でシュートモーションを構えデイフェンスをかく乱してポストプレーをねらった。そしてポストプレーが駄目と判断したときミドルシュートを打ってきた。又勝とうとする意慾的な行動は攻防に相当手荒いプレーをした。

イーグルスはポストを完全に守りミドル、サイドのシュートはGKに任せ速攻で得点をとる作戦を立てた。

前半25分迄体格の大きいプレーヤーの動きとスピードあるポストプレーをよく守りGKの巧守もあって7点におさえた。然し防御に力を取られ動き疲れて速攻が出ずセットオフェンスも大きな壁にぶち当り、シュートが思うように打てず期待を裏切り1点に止まった。25分を過ぎる頃ドイツの攻めあぐみからくる疲れで動きの鈍ったところを連続3点決め前半8－4とかろうじて面目を保ち後半の反撃のキッカケをつかんだ。

ハーフタイムのミーテングで防御がよくても速攻出来ない限り勝利は望めないのでサイドがヤマをはって飛び出し速攻をやること、そしてセットオフェンスをサイドにもって行くことを決めた。

後半に入ると西ドイツは前半の疲れによりミスと防御へのかえりが遅くなり始めた。そこでイーグルスは速攻に出てポイントをあげ15分にやっと9－8と1点差迄追いあげた。その後10分間に2度も1点差のシーソーゲームを繰り返したが体力の消耗とシュート力の弱さはどうしても同点に持ち込めなかった。そのあとメンダッハ、イバースの気力のこもった強引なミドルシュートを3点決められゲームが終了した。

失点14と防御はよかったが守り疲れで速攻が出来ず又大きい選手の一線防御に対してこの攻撃が中央に集まり過ぎてサイド攻撃が少なくシュート力の弱さも手伝い期待の井上・青木の強引なシュートが厚い壁に遮ぎられて決まらなか

った。東・北岡のタイミングを狂わしたシュートが決ったものの結局体格、プレーの差と一度もリードを奪えず勝利から見離された。

話題となった西ドイツチームの実力は欧州では地方の選抜チームの実力で現にハンブルグの選抜チームであった。欧州の上位国のナショナルチームの実力はあらゆる点で彼等より数段勝っていることを知らなければならない。然し彼等の示したボール握りからくる正確と自由自在のハンドリング、シュートのスピード、ポストプレーの鋭さ、またGKが身体全体を使ってゴールを守る好守は大いに学ぶべきである（村田弘・日本協会技術委員、大阪イーグルス監督）

# 第11戦 全静岡、リード守れず
## 西ドイツ、終盤で突き放す

男子第11戦は24日午後2時40分から静岡市・県営草薙体育館で全静岡が対戦。主審・渋谷行康（日体大出）、副審・鈴木城、大橋昭重＝観衆約二千五百

西ドイツ 19（10―6 / 9―5）11 全静岡

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【全静岡】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | デュエル | GK | 吉田（教員団） | 0 |
| 0 | ケッセマイヤー | GK | 渡辺勝（清商ク） | 0 |
| 5 | グルンワルド | FP | 大石（清商ク） | 3 |
| 4 | メンダッハ | FP | 榊原（清商ク） | 1 |
| 0 | パール | FP | 藤井（清商ク） | 1 |
| 0 | トルカ | FP | 丸山（富士ク） | 0 |
| 1 | ゴルゲス | FP | 服部（清商ク） | 1 |
| 0 | グッシェル | FP | 堀（清水橘ク） | 5 |
| 3 | イバース | FP | 池田（清水橘ク） | 0 |
| 0 | オーネン | FP | 高久保（清水橘ク） | 0 |
| 0 | バーテル | FP | 渡辺正（清商ク） | 0 |
| 5 | ヒルマー | FP | 宮城島（清商ク） | 0 |
| 19 | （3） | 7MT | （2） | 11 |

【FPその他の出場者】▽全静岡 山田（清水橘ク）、井上（教員団）、望月（富士ク）いずれも得0 ▽西ドイツ ハルトビッヒ得1

**記者の目**

前半15分までは、まったくの互角で試合は運ばれ館内は大いに沸いた。

西ドイツは4分、5分、6分にイバースが得点をあげた。ポストプレー、ジャンプシュート、ランニングシュートと多彩な攻め。これに対し全静岡は4分30秒に堀、5分30秒に大石がともにアンダーシュートして決めた。7分には藤井が2分間退場したが全静岡は守りを固めた。9分に西ドイツが、10分に全静岡がともに7MTを決めて4―3と西ドイツが1点リード。

12分もドイツはメンダッハの見事なジャンプシュート、全静岡は15分に堀がフリースローライン近くからロングを決め、試合は1点を争う好ゲームとなった。この間の全静岡は1―5、2―4ディフェンスを併用して速攻に備え、西ドイツのメンダッハをマークしていた。しかし15分をすぎてから攻めが単調となり、15分から26分までノーゴール。西ドイツも23分から29分までノーゴールというありさま。

それでも西ドイツは20分、22分50秒にゲットして8―4とリードしていた。29分にはグリュンバルトが右15度の地点でフェイントをかけて全静岡のバックスを一人抜き、そしてヒルマーに得意のバックパス、これをヒルマーが決めたプレーはすばらしかった。

後半15分まではおもしろかった。それは全静岡が11―10と逆転に成功したからだ。5分には早いパスから服部が、10分には藤井が左45度からアンダーシュートで、12分には大石が7MTを、13分には全静岡ゴール前でのルースからカットに成功した堀がノーマークで持ち込み、10―10とタイに追いついた。喜んだのは二千五百の観衆。15分にはまたも堀が右45度からアンダーシュートを決めて11―10と逆転。この分なら全静岡の勝ちも予想されたほど。

ところが西ドイツは、15分30秒に7MTを得、グリュンバルトがこれを決めて11―11としてから元気を取りもどした。多少のラフプレーはあったが、グリュンバルト、メンダッハのコンビネーションであっという間に点差が開き、24分には16―11と5点差。全静岡は防戦一方に追い込まれてしまった。25分にはエース堀が退場（2分間）するなど後半15分から30分までの全静岡は全くよいところがなかった。

しかし後半15分に11―10と逆転に成功したあたり。全静岡の健闘は大いにほめられていい。またグリュンバルト、メンダッハのコンビネーションプレーは胸のすくようなプレーだった（鷲尾武治・共同通信社）

**技術評**

前半3分までは両軍ロングシュートの打ちあいで得点にならず、重苦しい雰囲気の立ちあがりとなった。

その緊張を破ったのは西ドイツ得意のローリングから左に位置したイバースが中央にまわりこんだノーマーク・シュートである。

しかし、全静岡もひるまず、元気いっぱいのクリス・クロスプレーにより長身ぞろいの西ドイツ一線防禦陣を沈めておいて、右45度から堀（明大出）、左45度から大石（清商高出）が、ロングシュートを交互にきめて、西ドイツのスタートメンバーと互角に戦った。

15分から25分にかけて西ドイツは14人の選手をめまぐるしく交代させて、得意のローリングから、メンダッハの猛烈なジャンプシュートをおりまぜての攻撃に、全静岡のディフェンスはどうしてもみだれてくる。サイドからポストに切り込む敵に対するディフェンスも、チョットした気のゆるみがゴール正面でのノーマークをゆるしてしまう。サイドがマンツーで詰めていっても45度のところでブロックされる。またチェンヂしたところのサイドのすきを強烈なシュートで得点する。結局前半4点差で終了（全静岡としては、3点差で後半戦をやりたいと念願していた）

後半に入ってからの全静岡の奮闘は素晴しかった。前半45度からのロングシュートだけにたよっていた全静岡が左サイドから服部の飛込みシュートをきめてから西ドイツのディフェンスがみだれた。藤井のアンダースローシュート、そしてポストにボールが入って7Mスローで1点差、こうなると西ドイツの攻撃も雑になる。全静岡は調子に乗って積極的な攻撃となり西ドイツのパスをカットして単身ドリブルとなる。最初の宮城島はGKデュエルの美技にはばまれたが、次の堀の単身ドリブルシュートは、デュエルを床に這せて10―10の同点、二五〇〇の大歓声は

さらにつづいて、此の日の当り屋、堀がまたもや、45度からロングシュートをきめて全静岡ついに1点リード、観衆は湧いた。この間15分全静岡は攻撃だけでなく防禦においても、西ドイツ得意のサイドからの切り込みによるダブルポスト攻撃をゆるさなかった、高久保（立大出）の好守もあって、一方的なゲームとなる。

しかしこれまで鳴りをひそめていた、西ドイツはメンダッハ、ヒルマーを戦列にもどすことにより反撃を開始した。例によってローリングから、メンダッハの強引なロング、ヒルマー、グリュンバルトの素早い走りに疲れのでた全静岡はついてゆけなかった。GK吉田（浜松南高教員）の美技で再三得点を阻んだが西ドイツの一方的ゲームとなって9点連続得点されて試合終了となる。

体力の差というかそれだけではない。西ドイツが全静岡のクリスクロースからの攻撃になれて、防禦方法を換えたこと、また1点リードされてもバックパスでポストに入れるだけの余裕があること等大変勉強になった。

本県に於ける2回目の国際試合であったが、選手団結成以来わずか20日間。この間に国体東海ブロック大会があったので実際には14日に8日間も合同練習をした。しかも昼間は各自の勤務に出て夜間だけ、普段なれない硬い体育館のフロアーでの練習が、選手団の気力と体力とチームワークをつくり上げ、立派な試合を展開してくれたものと思う（片瀬喜代次・静岡協会理事長）

## 第12戦 西ドイツ、復調の10連勝

### 序盤の拙攻たたった桜友会

男子第12戦は25日午後6時30分から東京・駒沢屋内球技場で東京桜友会が対戦。主審・勝繁夫（立大出）、副審・中沢重夫（芝工大出）、岡村昭二（東京教大出）＝観衆約二千四百

西ドイツ 24（11—8、13—8）16 桜友会

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【桜友】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ケッセマイヤー | GK | 加藤 | 0 |
| 0 | デュエル | GK | 小沼 | 0 |
| 3 | グルンワルド | FP | 渡辺 | 1 |
| 6 | メンダッハ | FP | 高野 | 6 |
| 2 | パール | FP | 山口 | 2 |
| 0 | トルカ | FP | 藤原 | 3 |
| 2 | ゴルゲス | FP | 山野 | 2 |
| 3 | グッシェル | FP | 鈴木 | 1 |
| 4 | イバース | FP | 高橋 | 1 |
| 2 | クレム | FP | 田中 | 0 |
| 2 | バーテル | FP | 大川 | 0 |
| 24 | （2） | | （3） | 16 |

**記者の目**

日本のプレーになれた西ドイツは『できることならもう一度全芝工大、全立大と試合したい』というほど調子も自信も上向いている。

この試合でも立ちあがりから余裕のある攻撃で前半10分6—2と差をつけ、守ってもすばやい帰陣と巧妙なドリブル・カットを見せるなど元気だった。

しかし、相変らずゴール前での日本のこまかい動きには弱い。そのもろさを桜友会がつけばもつれた試合になったのだろうが、肝心なところでパス・ミスやシュートの失敗があって、わずかに左腕の高野が右から左へ鋭く切りこんではジャンプ・シュートを決めたに留った。

主導権を握った西ドイツは後半しきりとメンバー・チェンジ。

そのスキに桜友会は7MTと山野、藤原、山口らのゲットで追いあげ22分には15—18としたのだが、西ドイツもメンダッハのロングシュートとバーテル、イバースらのポストプレーで再び点差を引きはなし10連勝を飾った。

桜友会は後半、反撃の気勢をあげただけに、緊張がほぐれぬうちにあっさり試合のペースを奪われた序盤の失敗が悔やまれよう。

西ドイツ選手の中ではグルンワルドの好リードとGKデュエル（後半のみ出場）のプレーが目立った。なかでも後半11分山野のシュートをはばんだデュエルの好技は味わいがあった。

デュエルは、その直前山野の好判断によるシュートに右肩口を抜かれていたのだが、つづけて山野がシュートを放っとみるや、瞬間右コーナーへの守りを固めた。相手のクセを僅かの間につかみとる彼の〝力〟はやはりヨーロッパ屈指といわれるにふさわしいものを感じさせた（杉山茂・NHK運動部）

**技術評**

西日本各地を転戦し一週間ぶりに帰京した西ドイツは、強行スケジュールにもかかわらず、来日第1、2戦の思わぬ敗戦のショックから、ようやく立ちなおり、第3戦以後白星を重ねつつ、日本チームのプレーにも慣れたようで、なにか心のゆとり、そして自信をとりもどしたように見受けられた。

果せるかな、ゲームになっても、終始余裕を持っての試合振り、スコアの方も常に、セーフティリードを保ちつつ、そして14名のフルメンバーを適宜に交代しながら、何か帰国日の試合に備えてチームの調整をしている様な感さえあった。

西独チームのポストプレーを中心とした横の変化に対して、桜友会は速攻をして早い動き、早いテンポのパスワークで、ディフェンスラインを攪乱し、カットイン又は中距離シュートをねらった縦の変化で対抗と云うゲーム内容になった。桜友会としては、身長差をカバーするには、このねらいは的を得ていたとは思うが、如何んせんこの試合に関しては、特に彼我のシュート力の差が余りにも、れき然とし、結局このスコアにあらわれ、これが勝敗を分けた様に思われる。シュートがひ弱わ過ぎた感が強い。と云うことは、体格腕力の差と云うよりシュートをする態勢タイミングが悪く、いわゆる逃げ腰のシュートが多かったことが余計シュートを非力なものにしていた様に見受けられた。

又早いはげしい動き、そしてパスも大きい西独選手の堅いディフェンスの前に何かむなしく、から回りしている感があった。

更に桜友会の攻撃が中央突破と云うことに余りにも片寄り過ぎた。もっと入る入らないは別にしてもサイド攻撃をかけるべきであった様に思われる。ポストにしてもしかり、例えポストにボールが通らなくても、ポストに相手が入ることによって、ディフェンスを下げることになり、そこで初めてロングのチャンスも生れてこようと云うものである。

西独チームもこれに輪をかけた様に、サイドからのシュートが一本もなかった。徹底的に中央からのポストプレーで対抗してきた、このチームなら中央からの得点が出来ると云う計算そして自信があったのだろうか。さすがに鮮かな二、三のフォメーションプレーとメンダッハのごう快なロングシュートを披ろうしてはくれたが、華麗なパスワークを身上とするチームと云う我々の印象から程遠かった。第一、二戦の頃に比較してみたら確かに帰陣は早くなった様だ。速攻の方も何回かチャンスをつかみかけたが、ほとんど飛び出すのは一人、それがつぶされると、あとのフォローがなくてパスアウト、トコトン追い上げると云うことはしなかった。

何とか一点でも二点でも得点差をつめ様と最後まで執ように食い下る桜友会を終始変らぬペースで圧倒し来日10勝目をあげた。

西独チームにとっては過去悪条件のもと、力を出し切れず不本意なゲームもあったことだろうがそれにしても我々としても彼等から学ぶべき点は数々あった様に思う（勝繁夫・日本協会技術委員、立大監督）

## 男子最終戦

# 全日本、すばらしい攻撃

## 若手の充実、ミュンヘンへ希望

男子最終戦は27日午後7時30分から東京・駒沢屋内球技場で全日本選抜が対戦。主審・安藤純光（法大出）、副審・佐野和夫・岡村照二観衆約二千

全日本 23（10―5、13―8）13 西ドイツ

西ドイツ男子の日本での成績は13戦10勝3敗となった。

**記者の目**

攻撃は最大の防禦なりとかいうが、それをまざまざと見せたのがこの日の全日本。西独を破った全芝工大、全立大の速攻を上回る破壊力で圧倒、前半で勝負を決めた。といって防禦の方がおろそかだったわけではない。前半、木野が西独の主砲メンダッハを徹底的にマークしたのが大変効いた。このためメンダッハ得意の〝弾丸シュート〟が決ったのは、わずかに三本、西独の攻撃力を半減させておいて、全日本はスタートから走りまくる。

まず開始1分、スローオフのローリングから長身の平岡が強引にカットイン、見事にゴールした。つづいて2分、木野がボールをカットすると独走して二点目。西独も懸命に走り、帰陣も素早いところを見せた。そして巨体を生かしたボディー・ブロックを巧みにまじえての応戦。11分には負傷回復のグリュンバルトがミドル・シュートを決めて1―3と迫ったが、このあたりから連戦の疲れがどっと出た感じ。

脚力の差がはっきり現れて、全日本の独走となった。全日本は平岡の豪快なシュートに、近藤の軽妙なアンダー・シュートをまぜて着々得点を重ね18分には9―3とリード。18分10秒と19分40秒には気のゆるみからメンダッハに弾丸シュートを許したが、前半を10―5で終了。後半は竹野、井上らベテランも活躍して西独を寄せつけなかった。西独は個人技に頼りがちでサイド攻撃がなかったのも敗因。平岡が強い手首を生かし、内側にひねってのシュトは、さしもの名手デュエルも手こずっていた。平岡の抬頭、木野、近藤、近森ら若手の充実ぶりからみて、ミュンヘン五輪での入賞が期待される一戦でもあった。（渡辺邦雄・朝日新聞運動部）

〔注〕技術評（荒川）は11頁別掲

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【全日本】 | | 得 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | デュエル | GK | 福本 | （大崎電気） | 0 |
| 0 | ケッセマイヤー | GK | 島崎 | （大阪イーグルス） | 0 |
| 3 | グルンワルド | FP | 竹野 | （大崎電気） | 2 |
| 5 | メンダッハ | FP | 近藤 | （大崎電気） | 5 |
| 1 | パール | FP | 北井 | （埼玉教員） | 2 |
| 0 | バーテル | FP | 木野 | （立教大） | 2 |
| 0 | ゴルゲス | FP | 近森 | （芝浦工大） | 5 |
| 1 | グッシェル | FP | 平岡 | （東京教大） | 5 |
| 3 | イバース | FP | 井上 | （大崎電気） | 2 |
| 0 | ヒルマー | FP | 西村 | （大崎電気） | 0 |
| 0 | ハルトビッヒ | FP | 金田 | （大崎電気） | 0 |
| 13 | （2） | 7MT | （2） | | 23 |

## 女子第7戦

# 田村紡得意の速攻さえる

## スピード不足の西ドイツ

女子第7戦は19日午後6時から津市・津市営体育館で田村紡が対戦。主審・金沢淑郎、副審・高山、奥田 観衆二千

田村紡 17（8―4、9―7）11 西ドイツ

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【田村】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ホイヤー | GK | 渡辺美 | 0 |
| 2 | ミューラー | FP | 種村 | 3 |
| 0 | ケーラー | FP | 渡辺好 | 2 |
| 2 | ミルター | FP | 水谷 | 3 |
| 4 | ネントビッヒ | FP | 小林 | 3 |
| 0 | ツン | FP | 清水 | 2 |
| 3 | ロイター | FP | 長谷川 | 4 |
| 0 | バービュラ | FP | 吉開 | 0 |
| 0 | ビールカンツ | FP | 渡辺信 | 0 |
| 0 | ポーリー | FP | | |
| 11 | （4） | 7MT | （2） | 17 |

**技術評**

U字形のスタンドは約二千の観衆でぎっしりと埋った。三重県で初の国際ハンドボール試合。拍手のうずの中をコマネズミのように田村紡の紺のユニホームが動きまわった。午後6時をわずかに経過した頃だ。

試合開始直後の速攻で先行した田村紡は、少なからず全員に落着きが見受けられた。緊迫が予測される試合で、先取点がどれほど貴重であり、有利であるかを如実に示した一場面と見た。

・この先行によって田村紡の刻々の攻撃活動には、練習時に近い素晴らしさを感じた。この速い動きの田村紡に対する西ドイツの心意気も盛んで、対大崎、対愛知紡を観戦した私の目にもはっきりとそれを伺い知ることができた。それは彼女達の攻撃から防御への切替え、すなわち帰陣の速さにもその一端を覗かせていた。試合はその後田村紡の加点で2―0となり全く主導権を握ったかに見えた田村紡も容易に3点と引き離すことができず、逆に西ドイツが、トリ

ックプレー、ブロックとポストプレーなどを巧みに使い分けるミューラーの優れた個人技と、田村紡バックスの消極的なアタックも手伝って7メートルスローで、加点しさらにミルターのロングシュートを許し、しばらくは2点差の試合展開となった。しかし試合も前半の終盤に近づく頃、西ドイツの動きの鈍ったところを田村紡の速攻とパスワークが冴え、渡辺好が両45でブロックを活してあげた2点と、再度放った長谷川のロングシュートが見事に決まり、8—4で田村紡が前半をリードした。

前半田村紡4点のリードの陰には、ゴールキーパー渡辺の好守と守備における渡辺好の好リードも見逃せない点である。しかし全員に今少しの落ち着きがあれば、まだまだ得点を重ね、前半で勝敗は決っていたように思われた。西ドイツも来日軍のベストメンバーでスタートし、積極的な攻防を展開し、しばしば田村紡の攻撃を食い止めていたが、全員にスピード不足の感は免れなかった。

休憩後再開された後半も、田村紡の攻撃は、一線防御で積極性を欠く西ドイツに対し、ローリングを主に、小さく速いリターンパス、それにブロックとポストの活用など多彩に攻め、その動きは観衆にハンドボールの妙味をアピールするに十分のように見受けた。

一方西ドイツの攻撃も前半同様ブロックとポストプレーを執拗に繰り返し、田村紡の守備のラフプレーに7メートルスローを得ること三度、これを左腕ネントビッヒの強シュートで加点し、さらに長身ロイターがサイドから放ったシュートが見事に決まり、一度は10—12と2点差まで追いあげる緊迫した試合となり、観衆を興奮させた。後半開始後13分を経過した頃である。この間田村紡のミスボールを拾ったミューラーの単身ドリブルの妙技も披瀝され観衆を唸らせた。ここで追いあげられた田村紡は、適切な選手交替でチーム全体としてのスタミナのバランスを保ちながら、全員が十二分に走りまくり、得意とするパスワークも乱れを見せず、その間ゴールキーパーから直接だされた速攻を水谷、小林、清水がよくうけ継ぎ、さらにロングシューター長谷川が目の覚めるようなロングシュートを右上コーナーに決めるなど、攻撃のスピードに衰えを見せず、本シリーズ最高の6点差で、全日本優勝チームの面目を堅持した一戦であった。田村紡の勝因は、全員が最後までよく走り、チームの長所を十分に発揮し、マイペースで戦い、全員むらなく得点したことにあると思う。

この一戦を振り返って西ドイツからわれわれが学ぶべき点をあげてみると、第一に、ボールテクニックの素晴らしさである。同じフォームから繰り広げられる幅広いプレーは、ボールを握り、自由に操るボールテクニックの産物であり、今後の日本ハンドボール界の一課題となるであろう。個人的にはミューラーとミルターの視野の広いプレーは特に強く印象づけられ、日本女子界には見られぬ巧技と言えるであろう。第二はチームリーダーに対して、他のプレーヤーが、常に忠実なプレーをする点であり、これも日本には多く見られぬことの一つと思う。

一方田村紡としては、11点の失点が示すように、防御での積極性に欠けていたこと、長身者に対する防御法について今少しの策があれば、易々相手にロングシュートを許したり、ゴール前でのラフプレーを引き起さずに、最少限の失点で食い止められたように思われる。その他ゴールキーパーの守備法、特に後半許したサイドから放った長身者の飛び込みシュートに対する策を研究する必要があるように思う。全体的には日本女子界に要求されているロングシューターの不足が、田村紡にもあてはまるように思われた。長身者を揃えている外人相手には、幅と厚みの攻撃と、素早く、しかも巧みなフットワークによる守備力を早急に体得することが、日本女子ハンドボール界にとって急務ではなかろうか＝スタンドからの観戦記＝（**宇津野年一・日本協会普及委員**）

## 女子 第8戦

# 大きすぎた立上りの失点

## 大洋デパート反撃遅し

女子第8戦は21日午後4時5分から熊本市営体育館で大洋デパートが対戦。主審・井上元二
副審・平井徳一、上妻武晴
観衆約二千五百

**記者の目** 平均身長、年令は西ドイツが172センチ、25才。大洋は155センチ、19才。

大洋は若さを生かしたスピードで押しまくらなければ勝ち目はなかった。

しかし立ち上がりの大洋は動きが鈍かった。西独は開始後6分までにミルター、ネントビッヒ、ケラーが立てつづけにシュートを決めて一方的なスタート。大洋のテクニックなど問題にしない体力にまかせた強引なシュートだった。

西ドイツ 13（8—4, 5—6）10 大洋デパート

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【大洋】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | デバルド | GK | 小原 | 0 |
| 0 | ホイヤー | GK | | |
| 2 | ミューラー | FP | 新保 | 3 |
| 1 | ケーラー | FP | 垂水 | 4 |
| 4 | ミルター | FP | 渡辺 | 1 |
| 5 | ネントビッヒ | FP | 射場 | 1 |
| 1 | ツン | FP | 今村 | 0 |
| 0 | ロイター | FP | 枝尾 | 1 |
| 0 | ケラー | FP | | |
| 0 | ヘウイツカー | FP | | |
| 0 | ポーリー | FP | | |
| 13 | （4） | 7MT | （3） | 10 |

大洋は8分に垂水が中央突破で1点、その後は再三のチャンスにパスミス、オーバーステップなど大洋らしからぬ失敗を重ね4点差で前半を終った。

後半に入り、大洋はかたさもほぐれ、思い切ったシュートを射って反撃し好ゲームとなった。終了3分前には新保が連続得点して2点差につめより観衆をわかせたが立ち上がりの失点が大きすぎた（**富岡淳一郎**・熊本日々新聞運動部）

**技術評** 熊本における初の女子国際試合。1—5ディフエンスで固める大洋デパートに対し、西ドイツは平均身長（FP）一六六・五センチの豊かな体を揃えてスタートを切った。

外人選手に対して不なれな大洋デパートは、立ちあがりからなんとはなしに、ピントのはずれたような試合ぶりで、簡単に序盤のリ

ードをゆるしてしまった。これでドイツは充分なるボール・キープの余裕をもってゲームを進める様になった。大洋のデフェンスが強ければ遠くにボールを下げて回し、中央ポスト、両サイドの隙が出来るまで時間を気にする必要はなかった。

大洋は8分にして初点を挙げ調子に乗るかに見えたが得意の速攻でボールを落したり、つまらぬ反則をくり返し四点の差を開いたまま前半を終ってしまった。

期待した後半も三分後、ドイツのミドル・シュートでGK頭上を抜かれ「立直る機会はないのではないか」、と云う不安なムードになった。

然し其の後大洋はドイツの一線防御になれ、ミドルをよく決め12—10とつめたが、長身のドイツ、デイフエンスに間合が近すぎシュートをカットされたことは惜まれる。

後半、全体を通じドイツのポストプレーに対し無策に等しく、シュートされたら得点、ストップをかけたら7Mスローから得点された。

12—10でタイムアップの笛はなったが、タイム外のフリースローが残っていた。

ミルターにハンドボールマガジン（注・本誌31号26頁）を地で行く様なダイレクト・シュートを食ったことも大洋が外人チームに不なれの感を深くした。

以上が試合経過であるが、大洋は追い込まれた窮地より何度も立ち直りかけ緒戦の不覚がなければ実によい試合を展開したと思われる。

しからばなぜ、緒戦に於て左右フリースローを二本、中央ポストプレー、サイドシュートと簡単に連続得点をゆるしたろうか。

第一には西独チームの間伸びしたパスのタイミングに迷わされた事だろう。ワンパンチのシュートやパスでなく幾つもコースを用意されたダブルモーションのパスが見にくく、パスの後を追い廻した事がゲーム中、常に後手にまわらねばならなかったのであろう。

第二はポストプレーと、それにからんで、7Mスローによる得点をゆるした事である。ブロックプレーをしながらポストに入ってくるポストマンを大洋デイフエンスがたやすく防御者の左に入れた事と、ポストマンに入れるパスに対してデイフエンスが間合を開けすぎていたのも非常に悪い防御であった。

ポストマンにボールが渡ってからではもうおそすぎた。体重の差を利用したエリヤぎわの力技にひきずられながらシュートされるか、7Mスローの反則になるかであった。只、小技をマスターしていない西独のミスによって得点をまぬがれたこともあった。

第三には走らない西ドイツに対して大洋は速攻で対抗すべきであったが得点機に自滅した事は全く惜まれる。後半に大洋新保がミドルシュートを良く決めた。彼女が前年のヨーロッパ遠征の勘を取戻したのかもしれない。国際ゲーム参加数十回と云ふ選手とゲームするには基礎技術も大切であるが豊富なゲーム経験も必要であることをわすれてはならない。

最後に西独チームは日本ハンドボール界に対して最適の相手であった。いろいろと学ぶこともあったと思う。この機会に中央、地方ともに前進される事を祈る次第である。（北川浩・日本協会技術委員）

## 女子第9戦 全大阪、逆転もつかのま 巧いローリングの西ドイツ

女子第9戦は23日午後2時20分から大阪府立体育会館で全大阪が対戦。主審・山本孝夫（日体大出）、副審・井上真也、山中善之祐＝観衆男子第11戦に同じ

西ドイツ 9（4—3 5—5）8 全大阪

**技術評** 全大阪は立ちあがり固くなって、平素練習時の動きが、まったく見られず、西ドイツが4—1とリード。このまま西ドイツのペースで試合が進むかに見えたが、全大阪は北村の7MT、中務（なかつかさ）が18分、19分連続シュートを決め4—3とせまり前半を終了した。

後半、全大阪は北村、梶原、福田らがボールをよく廻し、善戦をしたが、西ドイツも持ち前のうまさで、ローリングから1点をとって勝利を握った。

西ドイツは、確実にパス、キャッチをし、ハンドボールの基礎をマスターしている。ゴールエリア附近での動きは非常に早く、なかでもベテラン・ロイター、ミルター若手・ミューラーのプレーは光った（山田計・日本協会常務理事）

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【全大阪】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | デバルド | GK | 山本（大谷ク） | 0 |
| 0 | ホイヤー | GK | 馬淵（寝屋川ク） | 0 |
| 2 | ミューラー | FP | 田井（日体大出） | 0 |
| 0 | ケーラー | FP | 北村（日体大出） | 3 |
| 2 | ミルター | FP | 梶原（寝屋川ク） | 1 |
| 1 | ネントビッヒ | FP | 福田（大谷ク） | 1 |
| 2 | ツン | FP | 中野（寝屋川ク） | 0 |
| 1 | ロイター | FP | 中務（梅花クラブ） | 3 |
| 1 | ポーリー | FP | 魚住（寝屋川ク） | 0 |
| 0 | ケラー | FP | 岡（大谷ク） | 0 |
| 0 | ビールカンツ | FP | 竹村（寝屋川ク） | 0 |
| 9 | （1） | 7MT | （3） | 8 |

## 女子第10戦 ミューラー、ロイターが好コンビ 頑張った全静岡〝高校〟選抜

女子第10戦は午後2時40分から24日静岡市・県営草薙体育館で全静岡（高校選抜）が対戦。主審・H・コルデス（西ドイツ）、副審・入谷忝市、池田正次＝観衆男子第11戦に同じ

西ドイツ 13（7—3 6—1）4 全静岡

**記者の目** 全静岡は高校生の選抜チーム。西ドイツの大型選手に比べてなんと小さいこと。身長を相撲でたとえれば、横綱対幕下といったところ。全静岡の選手がいくら突っこんでも、すぐはね返される。シュートしてもミルター、ロイターが両手を上げてたたき落とす。壁に向かってシュート練習しているようなもの。

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【全静岡高校選抜】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ホイヤー | GK | 松　田（静岡城北） | 0 |
| 0 | デバルド | GK | 鈴木康（吉　原） | 0 |
| 2 | ミューラー | FP | 高　橋（吉　原） | 0 |
| 0 | ケーラー | FP | 鈴木悦（静岡城北） | 2 |
| 1 | ミルター | FP | 藤　原（清水女） | 0 |
| 0 | ネントビッヒ | FP | 増　田（吉　原） | 2 |
| 0 | ツン | FP | 長谷川（吉　原） | 0 |
| 5 | ロイター | FP | 小　島（静岡城北） | 0 |
| 0 | バービュラ | FP | 納　谷（吉　原） | 0 |
| 2 | ケラー | FP | 中　沢（清水女） | 0 |
| 1 | ビールカンツ | FP | 伊　藤（静岡城北） | 0 |
| 1 | ポーリー | FP | 佐　藤（清水女） | 0 |
| 13 | （0） | 7MT | （0 | 4 |

【FPその他の出場者】▽全静岡　望月（清水女）、渡辺、稲垣（吉原）何れも得0　▽西ドイツベッカー得1、ヘウイッカー得0

しかし全静岡の選手は必死になって立ち向かった。まず攻撃の面を見ると、前半1分40秒に増田（吉原高）が右15度からアンダーシュート（得点1―1）、15分に鈴木（静岡城北高）が高橋（吉原高）のパスを右45度からきれいに決め（得点2―5）、19分30秒に増田がフェイントをかけて西ドイツ・ディフェンスをうまく抜き、左45度から飛び込んだ（得点3―7）。後半は8分に鈴木が右45度のポストから決めた（得点4―9）。この得点経過を見ても、中央からのゴールインは一本もなく。右サイドから3点、左サイドから1点のみ。

全静岡はミルター、ミューラーをマークしすぎて両サイドの防御を忘れ、そこをうまくロイターにつかれた。最初の1点はミューラーのフェイントプレーにシテやられ、次いで4分、5分、6分とたて続けにロイターに3点を取られた。さらに18分、19分にもロイターに打たれてしまった。つまり、全静岡は前半7点のうちロイターに5点を取られたことになる。

後半はケラー、ビールカンツのポストプレーに得点を許し、西ドイツは、多彩な攻撃を見せてくれた。また西ドイツの10点目は11分にミルターがあげた。これは実に豪快なもので、満員のファンをうならせた。フリーフローラインからスピードの乗ったアンダーシュート。全静岡のバックス、GKはしばしぼう然としていた。それほどすばらしい一投だった。

敗れたとはいえ、全静岡は持てる力を十分に発揮した。とくに増田はよかった。前半5本のシュートで2点をあげ、全静岡の士気を大いに振るい立たせた。負けたという気持ちよりも、西ドイツのハンドボールに接することが出来た喜びの方が大きいように私は感じた。

西ドイツの軽快な動き、ボールを完全に振り、パスと見せかけて大きく腕を振りながらフェイントをかけてバックスを抜くプレー、強い手首など、高校生にとっては学ぶところが多かった。（鷲尾武治・共同通信社）

**技術評**

全静岡は県大会優勝の吉原高を主体に、清水女、静岡城北高による高校選抜チーム。これまでいくたびか訪れた外国チームに対して男女を通じて高校生だけの日本チームが対したのは、これが初めてであろう。

両チームの平均身長に約15センチの差があった。前半全静岡は2・4ディフェンスで相手のロングとポストを警戒したのだが、スローオフ直後西ドイツは45度より全静岡のデフェンスの頭上から強烈なシュートを決めて先取点を挙げた。全くスピードのあるアッという間もないようなシュート。全静岡も増田が右45度から強引に流して1対1とした。その後西ドイツは正確なパスワークとポスト、ロングを巧みに使い着々加点した。全静岡は再三の攻撃もコンビ不充分と、あせりの為かパスミスやシュートをカットされる場面が多かった。しかし、増田がセンターをきれいに割込んで決めたのは見事だった。3点目は鈴木がこぼれ球を右サイドから決めた。前半7対3と西ドイツリードで終了。

後半は完全に西ドイツペースで進められた。ポスト、フェイント、ロングと多彩な攻撃、守備にとっては、長身を利しての早いつぶしに全静岡は一方にかたまりすぎたしポストもつぶされ攻めのチャンスを欠いた。苦しまぎれのシュートが目立った。

防禦もノーマークが再三見られた。後半は6対1であったが全静岡の1点は鈴木が終了直前に決めた。

いずれにせよスコアーの開きはあったが高校選抜としては善戦であった。西ドイツは各地で試合し調子は上坂であったようだ。全静岡は選抜の為まとまった練習会も充分とれず、攻防のコンビがちぐはぐに見えた。

国際試合は勿論始めてであるが若いし、心理的に固くなったのかタテの突込みやポストのゆさぶりがあまり見られなかった。今少し変化のある速い動きやパスシュートを見せて欲しかった。

防禦もあの高さからのシュートには、手が出なかったようだし、足を使うフェイントにまどわされた感じがする。とにかく頭上を、パスがとおり、そのまま、シュートされる場面が多く見られた。逆に西ドイツはそのデイフェンスの低さと動きの鈍さをうまくついていた。とにかく、キープ力、パス、キャッチの正確さはもとより、攻防のケジメは充分に今後の参考にし勉強すると良い。経験も高校体力の面でも劣りはあった。がとにかく4点の得点は消極的ながら最初の目標であったので善戦と言える。（渋谷行康・静岡協会理事、全静岡監督）

## 女子最終戦　清水（田村紡）が決勝のシュート　残念な全日本のラフプレー

女子最終戦は27日午後6時30分から東京・駒沢屋内球技場で全日本選抜が対戦。主審・岡村昭二（東京教大出）、副審・佐野和夫（東京教大出）、安藤純光（法大出）＝観衆男子最終戦に同じ

全日本 8（5―3、3―4）7 西ドイツ

西ドイツ女子の日本での成績は11戦6勝5敗となった。

**記者の目**

「全日本に勝つため……」と前夜外出を禁止したドイツ。全日本も〝負けるものか〟と激しい斗志を燃やしてぶつかった。

全日本は、全日本総合優勝の田村紡・渡辺美（GK）、渡辺好、水谷、小林、清水それに大崎電気の早川、鈴木を加えてスタート。

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【全日本】 | | 得 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 0 | ホイヤー | GK | 渡辺美 | 田村紡 | 0 |
| 0 | ミューラー | FP | 渡辺好 | 田村紡 | 0 |
| 0 | ケーラー | FP | 水谷 | 田村紡 | 0 |
| 1 | ミルター | FP | 小林 | 田村紡 | 4 |
| 4 | ネントビッヒ | FP | 清水 | 田村紡 | 1 |
| 1 | ツン | FP | 早川 | 大崎電気 | 0 |
| 1 | ロイター | FP | 鈴木 | 大崎電気 | 2 |
| 0 | ポーリー | FP | 種村 | 田村紡 | 1 |
| 0 | ケラー | FP | 垂水 | 大洋デパート | 0 |
| 0 | ビールカンツ | FP | 新保 | 大洋デパート | 0 |
| 7 | （4） | 7MT | （2） | | 8 |

4日間の合同練習ではどことなくパスワークがシックリしない。ドイツが押し気味だ。

しかし、全日本は3分ケーラーのシュートをみごとキャッチした渡辺美のパスを受けた水谷が大学生と高校生ほども身長の違う〝大女〟の間をすばやくすり抜けると、ゴール前に走った小林にパス、ジャンプシュートがきまって先取点をあげた。この速攻成功で形勢は一気に逆転した。6分ロイターに押し込まれたが、11、12分に鈴木が連続シュートをきめてリード、さらに14分ローリングから種村、16分には小林の7Mがきまって5―1と一方的。だがこれからがいけなかった。勝利を意識したのか、懸命に反撃するドイツにシュートさせまいとして、ホールディングやトリッピングのラフ・プレーが目立つ。17、19分には二つの7M。これをピンチ・シューター、ネントビッヒにきめられて2点差。

後半全日本は好調なスタート。1分30秒速攻から、3分には7Mと、小林が二つのシュートをきめて再び4点の水をあけた。だがラフ・プレーは一向にあらたまらない。まるで特技――とでもいいたげな荒っぽさ。そのため4、11分に再びピンチシューター、ネントビッヒに7Mをきめられた、うまいフェイントでGKを惑わし確実に得点したのはみごと。全日本はあせり気味、18分には同点に追いつかれた。これを機にスタンドの声援も一段と熱がこもった。ボールをキープした全日本は懸命の攻撃19分右サイドから渡辺好がきれいなリターンパス、これを清水がポストプレーからきめてリードし、逃げきった。

それにしても全日本のラフ・プレーは目をおおうわせた。〝闘志〟と〝粗暴〟とを混同していたのではないか?。トルカ・ドイツ監督は「身長差をカバーするためには仕方がないんだろう……」と皮肉たっぷりに苦笑していたが、自滅へと突っ走る危険を多分に含んでいた。フェア・プレーに徹するよう心がけてこそ真の〝技の向上〟ができるのだ。（**大国拓哉・読売新聞運動部**）

## 対全日本戦・技術評

荒川清美

【女子】 来日以来の対戦成績は6勝4敗、強行スケジュールにかかわらず満足とまではいかなくともまあまあの成績である。残る最終戦はナショナルチーム、自然に斗志も湧こうというもの。この一戦だけは飾って帰国の途につき度いという気持の西独。果たして精も根もつき凄惨な一戦であった。

特に来日以来多種多様のチームに対し日本の特徴はつぶさに知り尽くしたので、あらゆる戦法を用い此の一戦にはかけるであろうと私も此の一戦に大なる期待をかけたわけである。

てつとうてつびセットプレーに徹しリズムをはずしてポストからのシュート。得点を確実に上げる。換言すればミスを少なくしボール保持時間を永くして相手の攻撃回数が少なくすれば必然的に勝利に結びつくことは明白な論法であろう。

しかし、日本としては動きのかんまんなパスにいかに対処すべきかを知っていたのである。かん急自在なパスワークもつめによって阻止され、カットからの速攻は日本唯一の戦法である。

それを計算に入れていなかったのではなかろうか、ともあれこの一戦は日本にとっては最も不利であるはずの防禦が最も有利に展開した一戦であるということができる。しかし、ミルター執念の一投は将来にも残る快投であった。

【男子】 西ドイツは、10勝2敗と満足すべき勝率ではあるが緒戦の全芝工大、全立大の大敗は肝に命じたものと見えその汚名をばんかいせんと意気けんこうたるものがあり、それにけがのため前二戦には欠場したグルンワルドを配した必勝のベストメンバーで対戦。

対する日本も手の中を知った木野、平岡、近森、近藤それにリードマン・ベテラン竹野、福本を配し一挙に勝敗を決せんという積極的な布陣の対戦であった。

戦前我々の予想は日本が勝つとすれば前半に決するであろう。後半に持ち越すようではと一沫の不安をいだいていた。

日本は初戦から期待どうりの活躍、センターに平岡、両サイド木野、近森のコンビ、それに動きの近藤で広く厚く攻めたて、思う存分のゆさぶりができ作戦通りの試合であった。

守ってはつめを早目にして相手の動きを止め、クロースポストをふうじカットをねらいキーパとのコンビも申し分のない防禦に成功したのである。一方ドイツはメンダッハ、イバースそれにグルンワルドの見事なるパスワークに頼りすぎ、それがために混乱を来たし、無理してサイドからシュートをすればまた日本の速攻に結び付いてしまい手の施しようがない感をいだかしめた。

ドイツとしてはドリブルからのパスを生かし時間をかけて日本の防禦を近づけ広がった際のポストプレーを生かすべきではなかったと考えられる。

それにしても各々のプレヤーは有利な態勢になればすかさずシュートをするとか、フェントパス後のメンダッハのロングシュート、イバースの自在のチャンスメーカーとしての動きそれにグルンワルドの見事なパスはさすがにとうならせるものである。日本の学ばねばならないことであろう。

日本の反則の多いことと相手にきよう意を感じさせる動作があったことは今後国際試合における一つの課題として残されたものである。日本の総合力が向上したことは、ドイツチームも認めたことであるが、世界のトップレベルまでには、種々問題が山積されて居る。それを協会も選手もそれぞれの立場で一つ一つ解決していかねばならないことを痛感した。

ドイツの選手団一行が誠に無理なそして強行スケジュールをこれという事故もなく、遂行して頂いたことに感謝すると共に、本当に御苦労様でしたと厚く御礼を申し上げ一行の健斗を讃える次第である。（日本協会理事長）

# 前半戦技術評（前号未掲載分）

**男子第2戦　全立大24—11西独**

前半開始後全く全立大のペース、見るべきものと云えば、木野、安達、北村、野田などの速攻、セットオフェンスを折りまぜた多彩な攻撃のみ。暑さ、疲れもあったろうが、全く期待はずれの試合であった。わずかに、イバース、ヒルマーのポストプレーが注目されるだけであり、西ドイツの技術・戦術を学ぼうとするものには、期待はずれの一語につきる試合だった

（藤本強・日本協会常務理事）

**男子第3戦　東日本選抜　西独23—21**

前半、東日本選抜は速攻を主体に小気味のよい試合運びを見せてリードしたが後半は、じりじりと追いあげる遅攻の西ドイツ・ペースにはまり逆転負けした。

立上がり東日本は平岡のタイミングのよいジャンプシュートで好調なスタートをきり、平岡、北井等のシュートがコーナー一杯によく決まった。これは、西ドイツの防禦が殆んどゴール前に一線に近いため、スピードに乗ってカットインする平岡等のジャンプシュートが身長差とあまり影響なく打てたからである。一方、西ドイツは、得意のポストプレーをみせるが、成功率は少なく、ポイントゲッター、メンダッハの個人技で辛くも得点を加えるだけであった。

後半に入って、西ドイツの勝たねばならないというファイトはすさまじかった。前半において東日本の試合運びもわかり、速攻に対するすばやい帰陣、特に、ゴールキーパーからの速攻に移るパスアウトは殆んどつぶした。また、前半の一線防禦を2—4とし、東日本にやや前進した形となり、全体の速攻のコース、特に、平岡のジャンプシュートにそなえた。この作戦が効を奏し、また攻めては、45度のポストプレーと、イバースの好シュートで10分後にはたちまち同点に追いついた。

平岡のシュートチャンスをつぶされた東日本は、樫塚、北井にボールを集めよく反撃したが、選抜軍のため、どうしてもコンビネーションがとれない。後半の山場は10分後、強烈なメンダッハの連続3点のロングシュートである。これが勝敗の分れ目であった。東日本は西ドイツのポストプレーを警戒するあまり、メンダッハのマークをおろそかにし過ぎた。それにしても同じようなコースを連続3点とは痛かった。

リードしてからの西ドイツは、メンダッハを一時ベンチに休ませ、ストーリング気味の遅攻戦法をとった。東日本もようやく北井、平岡が決めて一時同点に追いついたが、手痛い7Mスローと、再びメンダッハの強肩にリードを奪われ、最後の反撃も遂におよばなかった。東日本としては、マークされた平岡をもう少し使いたかった。必勝を期す西ドイツの中盤における烈しいつぶしと闘志のむきだしが印象的であった。（箱崎敬吉・日本協会審判委員）

**男子第6戦　西独20—12中大**

『日本の攻防にようやくなれた』という西独は、東北での連勝のあと、前日本チャンピオンチームの大崎電気にも勝ち、気をよくしていた。

立ちあがりから、連戦の体力を考えてか、スロー・テンポの攻撃3分ヒルマーが左45度からシュートして先制、中大もその間逆襲に出るが、喜田のシュートを長身のドイツ・ディフェンスに阻止され決まらず、相変らずのスローテンポで、高い位置からゆっくりボールを廻すドイツ。5分すぎヒルマーが正面ポストにうまく入り、きめて2点目をあげる、中大もなんとか得点をねらって攻めるが、速攻につながらず、ゴール前の防御陣の前からシュートを放つがきまらない。11分すぎ、速いボール廻しから喜田がフォローして正面から見ごとなアンダーシュートでようやく1点をかえした。ドイツは相変らず作戦をかえず、ポストを使った、ゆっくりした動きで、13分すぎ、長身グッシュルが右45度からロングシュートをきめる。そのあと18分ドイツのボールを中大よくカットし、速攻から2番城がきめ19分には10番喜田がせっかく同点のチャンスに7Mを落とし、逆に20分ボールまわしからパールに正面からロングをきめられた。中大もすぐ反撃に出て5番森山が正面から見ごとなジャンプシュートをきめ、めまぐるしい動きになった、しかし、そのあとまたお互にシュートきまらず、やや西ドイツのペースで攻防がスローテンポになった。22分ポストプレーを防御した中大が7Mスローをとられ、ゴルグが慎重にきめ、前半終了1分前ドイツのうまいセットから真中ノーマークを、オーネンにきめられ、中大すぐ逆襲、佐野が真中カットインときめて追い、6—4ドイツリードで終了。後半に入り、ドイツは相変らぬ動きの遅いしかも大きく遠い位置とポストを使ったボール廻しから1分半長身のメンダッハがスタンディング得意の右45度からスピードのあるロングシュートをきめ、中大のもたついている間にオーネンが右サイドからとび込み、続いてすぐ中大のボールカットをして珍しく速攻また、オーネンが真中からきめ、ポストプレーでバーテルがつかまったが、防御をふり切って、バック・シュートをきめ、調子づいたドイツは速攻から7Mをとりゴルグがきめて大量リード、中大も反撃に移り、森山が左45度からジャンプ、続いて中大堀切が速攻からのボールを右45度低い位置からロングと、ポストで7Mをもらってよく決め反撃、ドイツも速攻からヒルマー、グッシュルがきめ10分間で大量7点をあげてリード。

終了近くに、中大は小さく速い動きで、5番森山がよく中央附近でカットインし反げきしたが及ばなかった。終了3分前ドイツトルカ、オーバステップの反則をとられ、ボールを投げつけて行った、その態度が悪いと5分間退場を喰ったケースがあった。ルールの違いはさておいて、審判の選手に対する態度、反スポーツマンシップ的な行為に対する態度では見習うべきものが感じられる、主審のコルデス氏から何かを学びとろうと期待していたが、ゲーム自身に今一つ迫力がなく、身長に勝るドイツが常に主導権を握って、ノンビリムードのゲーム運びになったため

か、主審にも迫力が見られず、残念だった。全般を通して、ドイツの試合運びは遅く、中大は何とか速攻にといった感じはみられたが、ドイツの長身選手の守る上、横を抜ききれず、最後には真中に集中しすぎていた。もっと速い横の動きと、シュートに結びつく縦の動きを組合せてチャンスをねらうべきだった。連戦のためかドイツはGK・デュエル、イバースなど好プレイヤーを温存する余裕をみせていた。（佐野和夫・日本協会技術委員、審判委員）

### 女子第2戦
### 三菱鉛筆11―9西独

三菱が走り勝ったといえよう。第一戦を見て、西ドイツの速攻のなさを知ったためか、三菱は走りに走った。前半西ドイツは相変らずのスローペース。速攻をかけるかと思っても、誰も走っておらず、ミューラーもしくはミルターにボールは出され、ミューラーを中心にしたセットオフエンスになってしまう。

逆に三菱は速攻。セットオフェンスをひいてからも果敢に走り、落合、蓮見らが、積極的に打って出た。西ドイツディフェンスの頭上から、ロングシュートを決めるなど、小気味良い試合ぶりであった。大きく立ちふさがるデイフェンスの上から、堂々とロングシュートが決められているのだから、何も小さいを唱い文句にしなくても対等に争える印象を強く受けた。

西ドイツチームでめだったのはミューラーの好配球、ロイターのサイドシュート、ミルターのみせたバックハンドシュートであった。特に最後のものは見事であった。コンビにはさしたるものがみられなかったのは残念であった。

（藤本強・日本協会常務理事）

### 女子第4戦
### 大崎電気12―11西独

西ドイツは、ようやく日本の風土になれたためか、前3戦と比べ、帰陣が非常に早くなり、大崎の早い出足をとめ、長身を活かし、完全に片手でボールを持ってロングパスを多用。ミューラーを軸に横の大きな動きから大崎をゆさぶりロングシュートとポストプレーで前半中頃には4―1とリード、試合は完全に西ドイツのペースで行なわれたが、ミューラー、ロイターの主力選手を休ませた処を大崎も速攻から鈴木が得点してからガラリと動きが良くなり前半残りの5分間で4点を速攻の連続であげ、西ドイツを追い込み6―6の同点とする。

後半早川を中心にベテラン宇井黒川、笠原らが良くリードし速攻で押しまくったため、後半10分には2点をリードし前半と逆に完全に大崎のペースで行なわれた。西ドイツは中頃から疲労が見え動きが悪くなり連継プレーのタイミングが合わなく個人プレーが多くなり大崎にリードをゆるしたが2番ミューラーが1人で頑張り最後の最後までねばり後半3点を取り大崎を苦しめたが、5本の7MTを2本しか決める事が出来ずこれに対し大崎は3本中3本を決め7MTの出来、不出来で勝敗が決った。（近藤金博・日本協会技術委員、東京重機監督）

### 女子第5戦
### 西独12―9東京重機

長身でボールさばきの速い西ドイツに対し、小柄な東京重機がどのような戦法をとるか大変興味がもたれたが、やはり想像していた通り速攻で勝負に出た。

東京重機のスローオフで試合は開始され、まず四分山本（幸）が左45度からフェントで強引に割り込みシュートを決め1点先取。重機の動きは非常に良い。なおも点差を開こうとする重機は意欲的な攻撃を行ない、山本（タ）が再三ミドルシュートをするが惜しくも外れる。しかし5分に山本（タ）が飛び込み、シュートを決め2対0とする。このあと西独もミューラーからのポストプレーで1点を返す。西独はミューラー、ロイターの動きが目立つ。シュートと見せかけポストにパスしたり、自分で強引に割り込んだりして大活躍。しかし重機のディフェンスも堅くGK高野のファインプレーもあり、加えて10分には飯田の7MTなどで5対2とリードを奪いこれはいけると思われたが、この後重機に2分間退場があり惜しいチャンスを逃してしまった。西独はこのチャンスをミューラーの好リードでポスト、サイドと多彩な攻撃を展開してじりじりと点差を縮め、13分にはミューラーが独走し5対5のタイとした。西独はこの後ディフェンスを堅め重機の突進をよく防ぎ、19分にはロイターが7MTを決め逆に7対6とリードし前半を終了した。

後半に入るや西独はミューラー、ロイターなどが連続して得点し3分には点差は10対6と開いた。しかしなおも食い下がる重機は山本（タ）、島田のミドルシュートで反撃し、10分には10対9と1点差に迫りもう一息というところまでいったが、その後10分間は得点できず西独に押し切られ12対9で惜敗した。

東京重機は前、後半にわたり再三速攻で西独陣内をかきまわしあと一歩のところまでいったが、パスキャッチのミスでせっかくのチャンスをつぶしてしまった。このミスをなくすることが重機の今後の課題であろう。しかし平均19才と若く、はつらつとしたプレーはこれからの成長を期待させる。

（池田鉄哉・三菱鉛筆監督）

球界パトロール

# ほのぼのとした人間味……西ドイツ選手団

## 通訳をつとめた松本・鈴木両嬢の印象

西ドイツ一行は、今回の来日で11都市を訪れたが、各地で親善の実も大いにあげた。選手団と行動をともにして彼らの〝素顔〟に接した日本協会委嘱通訳の松本操、鈴木日出子両嬢にその印象を記してもらった。

### 松本操

西ドイツのハンドボールチームを9月7日夜出迎えてから、29日出発する日までの東京滞在期間を共に過したわけですが、通訳という仕事を通して感じた事を書いてみたいと思います。

初対面の握手でその人の感じというのが印象づけられると云いますが、その初対面で、なにかほのぼのとした人間味というものを彼等の中に感じ、それが今でも強く残っているのです。

選手の平均年令が高かった事に関して質問が有ったとき「我々はハンドボールが本当に好きでやっている、又出来るだけ長く続けていきたい。それでこそ本当の技術というものが得られるのだから」と云っていた事や、彼等が一つ一つの試合を（たとえどの様な相手でも）大切にしていた事など考えると、ドイツ人の完全なるアマチュア精神というものを見せられた感じでした。

来日当初、気候にも慣れず、睡眠不足で体力的に参っていた様です。審判の問題も有った様です。そんな話が出ると「我々は日独親善の為に来たのだから、いろいろの問題が有ったとしても、我々が最善をつくして試合にのぞみ、日本ハンドボール協会の招待に答えることが一番大切なことなのだから」という言葉がどの選手からも聞かれました。

来日早々に傷をしたグリューンバルトが四はりもぬった足で試合に出るといって困らせた事や帰国を前にしてパスポートとお金をなくしてしょげかえっているケッセマイヤーをつれて警察や大使館をかけずりまわった事などいろいろと有りましたけれど、ともかく皆んなそろって元気に、日本でのよい〝印象〟と野球帽やバットをおみやげに無事に帰国出来た事が一番私にとってうれしい事でした。

それと同時にやはり日本ハンドボール協会の皆様が東京はもちろん各都市に於て心から暖かいお世話をして下さった事が彼等にとって〝忘れられない〟印象だったと思います。

帰国後の便りによれば、「もうハンブルグは枯葉も落ちてきびしい冬を目前に控えています、ただ夢の様に過ぎた日本旅行をなつかしく想い出している」とか。スポーツを通じての人間関係がどんなに大切か学んだ次第です。

### 鈴木日出子

西ドイツのハンドボールチームと過した日々は、大変な事もありましたが、楽しい思い出だけが、今の私に残されています。

私は、今迄、ドイツ人との直接のお付合がほとんどありませんでしたので、32名という大勢のチームに対して、果してうまくやれるか、どうかという不安感がありました。しかし、皆さん良い方達ばかりで、不安は消えました。

彼等が、一度ハンドボールから離れました時は、「この方達が、あの激しいハンドボールをしているのか」と思われる程で、もし良く書けば〝のんびりしている〟悪く書けば〝ぬけている〟と表現したい方達でした。

試合中の事でしたが、私が感激しました事の一つに、仙台会場でのことがあります。女子は試合がなく、応援団でした。彼女等は彼女等独特のリズムによる拍手を、どちらのチームがシュートを決めた場合にも行ないました。すると始め観客の一部の学生さん方が合せていました。最後には全観客が一つのリズムによって、拍手をしていました。彼女等は大変に喜び、何とも書き表せないジーンとする日独親善試合にふさわしい風景でした。

あるレセプション会場での事。挨拶の時に、いつもは陽気ですのに、この日ばかりは不愛想でしたので、私は「やはり旅行の疲れが出て来ているのかしら」と思っていました。ところが彼等はお腹がすいていたのです。ビールとお料理を目の前にして、手を出せなかったのですから、うらめしかったのでしょう。

国民性でしょうが、彼等はいつ、どこでも歌を歌っていました。ハンブルグの民謡から始って、ある時は審判員のコルデスさんをからから替歌を、そして「幸なら手を叩こう」とそのレパートリは広く変化がありました。日本ハンドボール協会を通して彼等のチームのお手伝いが出来ました事を感謝してペンをおきます。

球界パトロール

# 成年女子、25分ハーフに（来季から）

## 複審制の採用も実現か

### トルカ氏、本部役員とこん談

日本協会では、最近のヨーロッパハンドボール界の動向と、IHF（国際ハンドボール連盟）のルール改訂機運を知るため、西ドイツ選抜チーム監督ヘルム・トルカ氏（西ドイツ女子ナョナルチームコーチ、ハンブルグ・クラブ指導者）を招き、9月28日午前10時から東京・体協401会議室で馬場副会長、荒川理事長、中沢技術部長、安藤審判部長など主として技術分野の関係者がこん談を行った。

席上、トルカ氏は『1972年のミュンヘン・オリンピック大会をめざして、ヨーロッパ各国はかなり積極的な活動を示しはじめている』と語り、『女子の参加は、今後さらに検討が加えられるだろう』と話した。

またIHFのルール改訂機運に関しては『変動はそうないと思う』と前おきして、次の諸点を明らかにした。

一、1968年度からすべての国の女子公式試合時間は25分ハーフとなろう（注・現行20分、今夏IHFから送られたルールでもそのようになっている）

一、ヨーロッパの一部の国で試行されている〝複審制〟が成文化されるのは時間の問題だ。（これによってゴールジャッジ制廃止）

一、フリー・スローの際、スロアー以外の選手がフリースローライン内に居ても、出ようとする意志が示された場合と、次のプレーに関与しないかぎり反則をとらない。

×　×　×

こん談会後荒川理事長は『ルール問題に関してはIHFと連絡をとったあとで、国内規則を改正したい。しかし、女子の25分採用はヨーロッパの大半の国が、この10月のインドアシーズンから実施に踏み切ると伝えられているので、日本の関係者も、来シーズン初頭に切り替えられるよう準備を進めて欲しい』と語った。

なお、複審制については、審判部で検討が加えられるが、早ければ11月東京で開かれる第4回東京選手権をテストケースにしようという構想があり、日本協会、審判部、東京協会（同大会主催者）の三者で今後打ち合わせが行われる予定。

対談中のトルカ氏と日本側役員

ミ　対大崎電気

男子第２戦　対全立大

戦　対東日本選抜

男子第９戦　対全京大

ミ　対全日本

女子最終戦　対全日本

## 虫　　戦　(1967.9.9〜9.27)

男子第１戦　対全芝工大

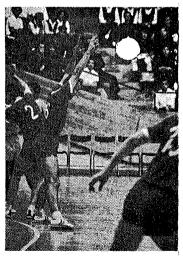
女子第１戦

男子第３戦　対東日本選抜

女子第３戦

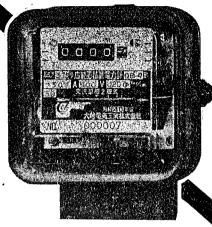
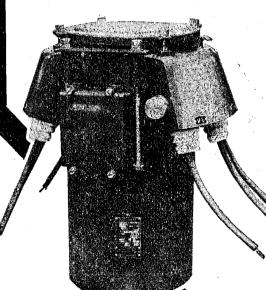
女子第８戦　対大洋デパート
（熊本日日新聞提供）

男子最終戦

対　西　独

*Osaki*

最高の確度と信頼度を持つ

# 電力量計

| | |
|---|---|
| 単相用 | OB－7形 |
| 3相用 | OW－7形 |
| 精密用 | OP－3形 |

OB－7形広範囲単相積算電力計

# 計器用変成器

6600V用重予型PCT　PDN形

## 主要製品

電力量計・電流制限器
計器用変成器・電圧調整器
配電盤・分電盤・制御盤

# 大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場　東京都品川区東五反田2－2－7　電話東京（443）7171代表
蒲　田　工　場　東京都大田区多摩川2－8－1　電話東京（732）6511代表
埼　玉　工　場　埼玉県入間郡三芳村大字藤久保　電話 0492 －61－ 1205

特・別・座・談・会

# 日独戦を顧みて

～五輪強化へどうつなげるか～

出席者（敬称略）

日本協会理事長　荒川清美
同常務理事技術部長　中沢重夫
同常務理事審判部長　安藤純光
全日本男子監督　北村尚英
全日本女子監督　宇津野年一
日本協会技術委員・立大監督　勝繁夫

司会・本誌編集部

——七人制一本化後はじめてヨーロッパから招いた代表チーム。それも球界待望の外国女子の初来日とあって内外から多くの期待がかけられるうちに行われた今回のシリーズですが、今日は多くの角度からシリーズをふり返ってみたいと思います。まず、荒川さん。日本の男子3勝10敗、女子5勝6敗という成績をどう感じられますか。

**荒川**　私は最初、男子4勝、女子4勝とみていたのです。

男子は全芝工大、全立大、大崎電気それに全日本。女子は全日本総合の上四つと全日本というわけです。

それが男子は一つ負けすぎ。女子は勝算ありとしていた大洋デパートが負け、不利かなと見ていた三菱鉛筆、愛知紡が勝った。さし引き一つ余分に勝てたということです。

——女子の場合はそうすると嬉しい誤算ですね。

**荒川**　まさか大洋が負けるとは想いませんでしたが、各チームともよくやってくれて〝レベル向上〟という風評を裏付けてくれたのはよかったと思います。

**中沢**　日本の女子のレベルはヨーロッパでも相当高いので、これによって一そう注目されることになると思いますよ。

——それでは男子の西ドイツチームの印象をまずうかがうことにしましょう。

勝さんは今春の世界選手権に行かれているのですが、世界のトップレベルからみて、今回の来日チームはどの程度のレベルでしょう。

**勝**　「まんなか」ぐらいとでもいいましょうか……。

というのは、今回のメンバーの主体はクラブの連中で、それにナショナルチームの選手が加っていたわけで、この逆の編成ならやはり、日本チームは全日本がどうにか1勝をあげ得た程度で、〝善戦〟がせいいっぱいではなかったろうかと思います。

西ドイツナショナルは現在世界第6位。その時のメンバーよりちょっと落ちるということで「まんなか」という評価をしてみたのですがね。

**中沢**　私はこれまでヨーロッパに2回行かしていただいているので、その時の体験から、ナショナルチームならともかくクラブ主体のチームなら勝てないことはないと思っていましたし、技術部としても3～4勝はという強気な目標をたてていました。

**北村**　僕は卒直にいって期待はずれでした。実際にチームを見てみて「なあんだ」という気になりましたね。

——具体的にどんなところに失望したのですか。

**北村**　プレーに厳しさがないということですね。

僕のヨーロッパ遠征の時の印象ではルーマニア、チェコといったチームの選手はすべてのプレーが執念にみちていて迫力がある。

**荒川**　これはやはり西ドイツが、本格的な室内シーズンに入っていなかったことや気候的にまいるという条件の悪さもあったと思う。むこうはいま15度ぐらいだそうで、はじめのうちは暑さにすっかりいかれていた……。

**安藤**　たしかにそれは云えるでしょうね。全般にスピードの乗ったプレーが少かった。

あの大きな身体にスピードがプラスされれば、さぞかし豪快な試合ぶりが見られたろうにと思うと、やはりベスト・コンディションで来日して欲しかった気がします。

第5戦（9月15日・対大崎電気）あたりかなりスピードが出て来て、これからは本領発揮かなと思ったのですが、最後までつづかなかった。

**宇津野**　私は実際に本場を見ていないので話を聞いた範囲で、共産圏諸国よりきれいなハンドボールーいわゆる華れいなパスワークを紹介してくれると期待していたのですが、やはり皆さん云われたようにスピードがなかった。ただ攻防両面でのチームとしての巾とか厚みといったものは、さすが名門らしく見るべきものがあったと思います。

——期待はずれというより持てる力を存分に発揮できなかったというような感じがたしかに強いのですが、ここらあたりに外国チームを招く時期とかメンバー構成の難しさがあるようですね。

**荒川**　そうですね。特に西ドイツの場合、いまだにあそこは7人制と11人制の二本建てで、今はまだ11人制のシーズンでしょう。

日本に来るというので、特別に8月末から7人制の練習をしたというのですが、それもアウトドアでちょっとやっただけらしいのですね。

前に来たフランスのステラクラブなどは、フランスは7人制だけだから、何時招いても問題はない……。

今回でよく判ったのですが、二本建ての国から招くのなら4月末か5月。つまり室内のレギュラー・シーズンがすんでからということ以外ないようです。

——メンバーの構成についてはどうですか。

荒川　トルカ監督に聞くと、男子のナショナルチームは今春世界選手権を終った段階で一応各所属クラブに帰してしまい、今回の来日にあたっては、ハンブルグ協会が、ナショナルチームのプレイヤーに呼びかけて参加を募ったようです。

　ですから西ドイツ協会はチームを〝ナショナル〟と認定するだけで遠征費用はあくまで自己負担。そのために今春の世界選手権の花形も辞退せざるを得なかったというところらしいですがね。

——たしかに、来日メンバーのリストが日本協会にとどけられたのは8月も20日をすぎた頃でしたからね。では次に女子チームの印象をうかがいましょう。

宇津野　なにしろ外国の女子チームが来るのは初めてのことですし、私自身本場のプレーを見ていませんので、予測する資料が何もありませんでした。ただ、宮原君（大崎電気監督）などに聞いて、おおよその見当をつけて、まあある程度は善戦出来るという希望を持っていたわけです。

　しかし、体格の違いからくるボールテクニックにとまどうのではないかと思ったのですが、男子同ようスピードがなかったので予想以上に日本側が戦えたと思っています。

安藤　男子が大きい大きい大きいといろいろなところで云われますが、女子こそ大きいという印象が強かったですね。

　身体が大きいから当然動きが鈍くなると思ったのですが、その通りで、小さい日本の女子の方がこまめに走って勝機をつかんでいたのは、日本の女子界の将来というものが、大きく開かれているといってよいと思うのです。

北村　予想以上にいいチームだったですね。ヨーロッパの女子というのはナショナルチームはともかく、地方のクラブチームは、勝負を競うことよりも仕事の片てまにレクリエーション的にやろうという意識の方が強いわけです。

　でも寄合世帯のためか、チームプレーで得点しようとする精神に欠けて、やたらとバックシュートを打ったり確率の乏しい個人技に走っていたのはどうかと思いました。

荒川　北村君のいうようにヨーロッパの女子スポーツというのは社会性が強いというのかな、自らの健康のためにスポーツをする傾向が強いので、スポーツをやるために入る日本の実業団とはおのずと差が出てくる。

　その割にはトッププレイヤーが加っていたせいか見るべきものの多いチームでした。ただ日本チームの方が得点力を持っていたことが5勝という星につながったのでしょう。

宇津野　むこうの助監督さんが、日本の勝因はスタミナだといってました。そして、日本チームの練習量の豊富さがうらやましいとも……。

　しかし、さすがに日本の選手をらくらくとかかえこむようなディフェンスや、攻撃面でのブロックプレーなど学ぶべき点が多かったですね。欲を云えば、スピードのうえにあの多彩さがプラスしてほしかったと思います。

安藤　それにしても日本の選手は若いね。西ドイツでは32才のヘーウィガーをはじめ25才以上が7人もいたものね。荒川さんのいわれた社会機構の違いでしょうね。これは。

北村　ホイヤーもオリンピックをめざすより、これからは一日でも長くハンドボールをつづけることのほうが目的だといっているほどですからね。

——日本の女子スポーツもそうした傾向がもう少し強まってもいいですね。ＯＧクラブの活動などみても、いわゆる若手だけで、古い人はだんだん姿を見せなくなる。

勝　いいトシして何時までも……といった気持ちが、自分にもあるし、ハタの目も強いうちはダメでしょう。

——来日チームの印象に残った選手とプレーがあったら聞かせて下さい。

中沢　男子ではメンダツハのロング・シュート、イバースの動き——特に配球とつなぎのうまさ。グルンワルドのフォロー・プレーが目立ちました。

宇津野　グルンワルドみたいな選手は世界のトップ・チームを目ざすには絶対欲しい選手ですね。

荒川　彼は来日早々宿舎で足をぬうほど切ってしまい前半戦出られなかったのだが彼が初めの二試合に出れば、もう少しその展開が変って来てたかも知れない。

中沢　要といわれたデュエル（ＧＫ）は、今春の世界選手権でわれわれは顔を合わせているのですが、その時よりももろかった。

北村　ディフェンス・メンの悪さもあるでしょう。特に連けいの……。

中沢　それはあるだろうね。

北村　第1戦のハーフタイムで、彼はカンカンになってみんなに怒ってるのです。守りかたが下手だといってね。

　でも、そうした点を差し引いても、もろい印象はぬぐえなかったですよ、僕は。

勝　控えのキーパーのケッセマイヤーというのは日本のシュートに手も足も出なかったね。

——他に目立った選手はいませんか。

北村　もっとも日本的なつっこみを見せていたと思うのはヒルマーですね。ジャンプシュートもいい。

中沢　パールのポストとのつなぎもうまかったナ。

勝　私はイバースというのがいちばんよかったように思う。何より足がいい。

北村　速攻の時もイバースしか出しませんね。

安藤　さっき話に出たグルンワルドみたいなタイプは日本で見られない。特異なプレーヤーだね。

中沢　彼はナショナルプレーヤーでしょう。〝誇り〟みたいなものを他の選手に対して持っていましたね。

勝　なにしろ外国ではスポーツに打ちこむからはナショナルチームの選手になることが第一の目的なのだから、そうでない連中は一目おくことになる。

安藤　デュエルが第1戦で怒ったというのもそれと同じなのでしょうね。

荒川　どの試合か忘れたが、グルンワルド

がＧＫの交代を命じたことがあるね。

――では女子の選手に移っていただきましょうか。

**宇津野**　ＧＫのホイヤーとミューラー。

**中沢**　これはうまい。

**宇津野**　スタミナ不足のせいかよく交代はしていましたがミルター。それにシュートの強いネントビツヒ。ポストでは金髪のツン。それにロイター。こんなところではないでしようか。

**安藤**　ツンを除いてはみんなナショナルプレーヤーでしよう。中でもミューラーはいちばんだ。

**宇津野**　年若のくせに他の選手をアゴで使っている。

**北村**　初練習の時もいばってましたね。

**宇津野**　ミューラーとミルターが戦列に入つた時は強い。

そのミルターも宮原君に聞くとこの前の世界選手権では補欠だそうで、ミューラーにいたってボール運びや道具持ちだというのですからその層の厚さが判りますね。もっとも当時より進歩してはいるのでしようけれど。ミューラーのようにボールを持ったと同時に、それを送るべきコースを3本も4本も同時に判断できる選手は日本にちよっといませんよ。

**北村**　たしかにミューラーはうまいけど、シュート力が物足らないですね。

地味だけどビールカンツというのがよい動きをしてたのではないですか。

出て来ると必ずノーマークチャンスをつかんでいた……。

**荒川**　ホイヤーとミュラーがずば抜けていたと思うな。この二人がいただけ男子よりも強力な軸を持っていたといってよい。それにミルターだね。

**宇津野**　最終戦に見せたミルターのシュートはすばらしかった。

ディフエンスのわきの下から手を出してね。ボールを後へ引いて出るタイミングが日本の選手とまるで違う。以前、機関誌に、彼女がタイムアップ寸前にディフエンスの壁をかわして、横たおしになりながらシュートを決めた写真が紹介されていましたが、今回もそれに近いプレーを九州かどこかで見せたそうですね。

――それでは男子を通じて西ドイツから学ぶべきプレーをあげていただきましよう。

**宇津野**　日本人だとポストプレーはポストプレーにすぎないのですか。彼らのポストはブロックを併せて多彩ですし、ポストの動きが流動的なのが特徴でしたね。しかもポストマンがつねに有利な場所をとっているというのは見習うべきことです。

**勝**　たしかにそうですね。

実は今度来たトルカ氏にわれわれは前にハンブルグで指導を受けたことがあるのですが、ポストの立ちかたについては実にやかましいし、その練習に多くの時間をさいているのです。

ここで問題なのは今の日本のディフエンス、平気でエリアを横切ったりするのですが、むこうではこれをきびしくとるから一切それが通用しない。

ポストプレーとかブロックプレーとかを完成させるには、判定問題が大きくからんでくると思う。

**宇津野**　ブロックの問題にしても〝押す〟ことに対する解釈があいまいなうちは、ちやんとしたプレーが出来ません。すぐとる審判員もいるし、そうでない人もいる……。

**中沢**　西ドイツのブロックプレーは手を広げて立ちふさがるだけです。実にいいと思う。

**北村**　彼らのブロックはそれとタイミングがいいのです。

ブロックをかけられたナと思ったらポンポンとポストにボールが渡って、もうノーマークから射たれている。

つまり、ぶつかった瞬間、すでに次のプレーに移っているのですから、それからのトラブルが少いわけです。

――日本のブロックプレーというのは、つかまえているのが明らかにわかりますものね。

ブロックとインタフエアを錯覚してるのじやないかと思う時もあるほどです。

**中沢**　ブロックをかける時間が〝瞬間〟といってよいほど短いのですよ、彼らは。

**北村**　それと目立ったのはポストでのキヤッチングが確実なことですね。

**安藤**　後半戦になって彼らの動きがよくなるにつれ、ドリブルを非常にうまくカットしていたのが目立ちましたね。

**中沢**　リーチが長いという利点が活かされていた。

**宇津野**　全体的に、ここぞという時は腰がよく落ちていましたし、さすがそうした基本は全選手がしつかり身につけているのは感心させられます。

**荒川**　戦法面では彼らは「つなぎ、チヤンス、シュート」というものをしつかりと心得ていた。これは豊富な国際経験によって生まれるものでしよう。

それともう一つ、しきりに選手交代をしていたが、それでいて少しも全体の展開のリズムを狂はさないのだね。これは見習うべきだと思った。選手を交代させることによってチームプレーの組織がこわれてしまったり、リズムが狂うことはよくあることですよ。

――なるほど。今、皆さんが云われたことはたしかにこれまでの日本チームに欠けていた面ですね。

**荒川**　それに彼らは、走る時つねに足をクロス気味に運んでいたのも感心させられたね。

両足が開いていたり、平行だと腰が入らないでシュートするにもスピードが乗らない。クロスしたフットワークについては日本の指導者もこれまでずいぶん口をすっぱくして云っているようだが西ドイツの連中は、ごく常識としてそれを身につけている。

――ところで、昭和31年に来日した西ドイツ選抜と比較しての印象はいかがですか。

**荒川**　あの時は何しろ初めてだったからね。何もかも……。

**宇津野**　びっくりしたということなら比較にならぬほど、あの時の方が強い。走力、シュート力すべて驚異でしたよ。

**中沢**　日本もずいぶん桧舞台に出るようになったし、外国チームなれしたということもあるでしようけど、スケールは圧倒的に前の時の方が大きかったですね。

——そうなると、昭和31年の時は8連敗、昭和35年のルーマニアの時10連敗と、これらは11人制ではあったのですけれど日本は手も足も出なかった。それが、今回はともかくもヨーロッパのトップチームから勝ち星をあげることが出来るようになったのは、日本のレベル向上として喜んでいいものでしょうかね。

**荒川**　喜ぶということになるといろいろ問題も出て来ると思うけれども、ともかく再三のヨーロッパとの交流で日本チームが各チームともその総合力を発揮出来る態勢にはなったといってよいと思います。

男子の場合、第1戦第2戦それに最終戦はコーチ陣も主力選手もヨーロッパ遠征の経験者でしたし、この前の時より、いわゆるメドだけはつけられたというところではないですか。

——日本のあげた今回の勝利は〝ほんもの〟といっていいですか。

**荒川**　現在の力は認めることが出来るが『これでよろしい』とはいえませんね。何故なら、こういうシリーズは相手変われど主変わらずでしょう。

日本側は次々と策戦を考えることも出来るが、相手は転戦というハンディがある。しかも見もしらぬチームが連続する。同情すべき点が多いわけですよ。

**勝**　〝ほんもの〟かどうかといわれると私は慎重派だから、今回の相手の力などを勘定にいれたうえでないとね……(笑)。

まあ、今回のチーム相手ならこの成績は順当だと思います。

ただ、これが即世界に通じるかといえば難しいわけで、日本チームは一皮も二皮も脱皮しないと、世界の壁は破れないと思うのです。

ちょっと横道にそれるのですが、今春世界選手権に出る前にルーマニアに寄って、そこで例のクンスト氏（注・イオン・クンスト、前ルーマニアナショナルチーム監督＝昭35来日）に会ったら彼が『日本は新幹線などというすばらしいものが出来たり、他の工業力も大発展している。それなのにハンドボール技術はちっとも進歩してないじゃないか』というのですよ。

——なるほど。貴重な警告かもしれませんね。これは……。

**中沢**　もっとも、世界選手権を終ったあとで、彼は『君らに謝まらなければならない。日本がこんなにやるとは思わなかった』とわざわざ云いに来てくれたんですけどね。

ともかく、今回程度の相手なら〝やれる〟という勝ちムードで向かっていってもよいぐらいには日本のレベルも上がっていると思います。今までは〝善戦しよう〟が最高の目標だったわけですからね。

特に女子の場合、本場での評価も高いのですしなおさらです。

具体的には、外国チームに対してミドル・シュートが決まるようになったのは大きな進歩だと思います。

**北村**　今度ぐらいのチームなら全日本は勝ってあたりまえ、負けちゃあいかんぐらいに僕は実は思ってました。

だから最終戦を前にして出来ることなら15点差、悪くても10点差ぐらいはつけようというのが正直な気持ちでした。

問題なのはこれからの日本選手は、もっと経験を積まねばならないということではないでしょうか。

木野（立大）近藤（大崎電気）といったところが、少くとも竹野選手（大崎電気）と同じ、あるいはそれ以上のキャリアを積んでいなければいけない。経験が豊富なら、例えばその日シュートが決まらなく不調のようならボール廻しになるといった切り替えが出来ると思います。

個人技そのものは、ヨーロッパのトップレベルに近づきつつあるのですから、なおさらです。

**宇津野**　女子の場合は、さきほど云いましたように今回のチームと日本では練習量がはるかに違うため、それが勝負の分岐点になっていたと思うのです。

西ドイツにしてみれば、前半はどうにかもちこたえても、後半になると、スタミナ不足からイージーシュートをやたらに放って、それを止められては一気の速攻をあびて失点を重ねたということになるわけでしょう。

ここで問題なのは、日本の場合、単独チームですとフォーメーションプレーも穴もなくやれるのですけれども、全日本を編成するとこれがスムースに流れないのです。北村君のいった経験不足が女子の場合もはっきりしていると云ってよいのです。

——男女とも全日本をひきいられた監督から期せずして、経験不足という問題が出ましたが、こういった課題はこのあと話していただくとして、安藤さんは今回の日本チームの戦いぶりをどう見られていますか。

**安藤**　私は素直に男子3勝、女子5勝はほんものの勝利といいたいですね。

勝ったチームは、国内屈指のチームなのですし当然でしょう。

体格差という問題も、例えば最終戦などを見ていると、全日本が小さいとは感じませんよ。

——それでは次に今回のシリーズを今後の日本ハンドボール界のレベル向上と強化にどうつなげて行くかという問題について話しあっていただくことにしましょう。

荒川さん、今回の招待は親善が第一の目的だったのか、強化が第一義だったのか、そのあたりからまず……。

**荒川**　御承知のように今回の招待は前理事長時代からの計画で、実は引きついだけというわけだったのです。どちらかといえば親善色というものを強く打ち出して実行プランを建てはじめたのですが、ミュンヘン・オリンピックの出場国の一部を、オリンピックの二年前の世界選手権（注・一九七〇年フランスで開かれる予定の第7回世界男子7人制選手権）で決めようという動きがヨーロッパにあることを知りそれなら、とりあえず今回の西ドイツ招待を、ミュンヘンへのスタートの第一歩にしようと思って、親善にあわせてトップレベル強化もやろうと決めたような次第です。時期的にこの決定が遅かったために、その時はすでに国内の対戦チームも八分通り決まっており、全

日本選抜も最後につけ加えるといった感じになってしまったわけです。ですから当然、来年以後の国際交流はトップレベルの強化を第一の目的にしたいと私個人は考えています。

**宇津野**　たしかに今回のように全日本の対戦が1回だけということではなく、せめて2～3回は欲しいですね。

　地方での試合も、すべて地元ということでなく、地方協会が全日本と外国チームとの対戦を受け入れるといった体制も必要だと思うのです。

**中沢**　技術部としても、そうして欲しいと思います。3発ぐらいの滞同の転戦が出来るのが理想だと思いますよ。

**勝**　トップレベルの強化というものは、やはり確固たる信念がなければ出来ないわけで、ただ単に世界のレベルに近づいたといっても、やはり常に脱皮を心がけて進まないと上位進出の機会を失うだろうと思うのです。

**安藤**　ルーマニア、ステラ(フランス)、中国それに今回と、つねに国内での国際試合はギャランティが先決というのも、もう考えなければならないでしょう。少くとも、こういう方針で、このチームを招いたのだという態度は欠かしてはなりませんね。

**中沢**　相手あっての勉強なのですから、対戦希望が多いからよいというものではなく、相手のコンディションを考えてトップ技術を発揮してもらうようにしなければ意味がない。

**宇津野**　それと同時に勝さんの云われた確固たる信念というか、いわゆる日本ハンドボール界としてのトップレベル強化への統一した見解というものを一日も早く固めて欲しいものです。

**安藤**　男子の場合はヨーロッパ経験者も増え、国内でキャリアをつんだ選手も多くなっているので選抜軍を編成しても〝合わせる〟ことが出来るのでしょうが女子の場合は、たしかに一つにしぼったものは要るでしょう。

**宇津野**　今回全日本をお世話していちばん感じたのはその点なのですね。

　個々のチームのレベルはあがっているし、強いチームも数多く生まれているのですけれど、そのピックアップとなると、どうまとめるか迷うし、選手自身も苦労するのですね。

　ですから、外国チームが来る来ないにかかわらず全日本を編成しておいて、年2～3回の合同トレーニング（合宿）を行うようにすべきです。

**荒川**　それと同時に、いわゆる協会組織の強化というものも、ここで研究する必要がありますね。

**勝**　まったくですね。さきほどから出ている確固たる信念といっても、例えば男子の場合、東欧系のプレーに進むか、北欧系のタイプをとるか、これは大事な問題で簡単に決められるものではないでしょう。

　コーチング・スタッフというものの確立がまず必要になってくると思います。

**宇津野**　例えば全日本を組んでも一回限りというのではなく、それを育てようとしなければ意味がないわけで、コーチにしても一つの方針を押し通そうとする情熱、意気ごみが欲しいわけです。

**北村**　これまでの日本ハンドボール界はすべてに一本通ったところがない。コーチング・スタッフにしても、審判にしてもです。これでは世界の上位に進むことは出来ないと思うのです。

　特に審判技術の向上は、日本のレベルを引きあげることに大きな作用があるのですから、この面の対策は急務でしょう。

――現状の審判技術は高くないと思いますか。

**北村**　人間だからミスはあるとは思うのですよ。

　でも毎回々々とそれがつづくと選手がかわいそうだ。いちばん問題なのは、本来のプレーを殺してしまう笛を吹くことですね。

　それが秀れたプレーであればあるほど、ミスの責任は大きいわけで、大げさに云えば日本の進むべき道を閉ざしかねないとさえ思います。

**中沢**　それとはちょっと別になりますが今回のシリーズでもやはりずいぶんルール解釈に相異があったわけです。

　せめて国際審判員会議には審判部長をふくむ三人ほどは必ず出席させるようにして欲しいです。

**安藤**　国内の判定でいちばん大きな問題は、その基準が地区により、人により違うことです。

　これはどこの地区がよいとか誰がうまいとかの問題以前のことで、中央の態度とか判定基準を全国に徹底させるルートをいま考えているところなのです。

　また、国際的な判定解釈の相異はやはり、国際審判員会議に出ないということが原因です。レフエリーの技術もプレーの推移について行くよう努力することを切望したいですね。

**宇津野**　審判には主観の部分が多いのだから統一出来ないという考えかたが一部にあるようですがこれは間違ったことで、基準に近寄ろうという精神があれば、食い違いが生ずるわけはありません。

**勝**　ホイッスルがまちまちというのは、まったく困ったことですよ。

**宇津野**　審判によってあまりにも違うようだとプレーを変えなければならない。変えられるプレイヤーはそれでもよいが、そうでないと、ぶっかってしまって動きがとれなくなるわけです。

――だいぶ問題が細部にわたって来ましたが、時間もあまりありませんのでしめくくりとして、今回の経験を通してミュンヘンを目ざすからにはトップレベルをどうして強化したらよいかを話していただきましょう。

**北村**　全日本チームのメンバー選考をいわゆる上位チームにしぼらずたとえ1回戦で負けたチームでも優秀なプレイヤーなら選ぶといった体制を布いて欲しい。

**宇津野**　ともかくやらなければいけないといういわゆる根性を選手に植えつけるためにも、コーチ陣がそれを自覚するためにも全日本の合宿を2、3回はして欲しいし、例えば来年11月の世界女子を狙うなら、その前にヨーロッパへ武者修業に出して欲しい。

　こうしたことは、大きな障害があるわ

けでしょうが、それを打破するためには周囲の度量と当事者の責任感にあると思うのです。

幸い、女子の場合、実業団各チームに若い将来性のあるコーチがいるのですから、私が布石になっても、是非こうしたことを実現させたいと考えます。

**安藤**　北村君のいうような全日本メンバーの選考はよいことだし真の最強チームを造る無二の道でしょう。

それと日本のサッカーが西ドイツからクラマー氏を呼んで成功したように、ハンドボールの場合も、ヨーロッパから力のあるコーチを招いて指導してもらうこともよいのではないかと思う。

それに再三話の出ている〝日本の進む道はこれだ〟という柱を打ち建てるべきでしょう。

**勝**　安藤さんのいったような柱がないと力の持って行きようもないわけで、責任を持たされたコーチングスタッフによって世界をめざす指導体系の確立が急がれてしかるべきです。

**中沢**　今年の4月からいわゆる新体制というものになって、技術部としても、かってないオリンピックという大きな目標にむかって進もうとしているのですが、これまでになかった多くの理念・理論が今、各所から出されて、それを交通整理中というのが現状です。選手の発掘一つにしても予算をともなうことであって、そちらとの関連も考えないわけには行きません。

この座談会席上、いわゆる指導理念の大もとを発表するわけにも行きませんが、なお一そう煮つめて、確固としたものを出したいと考えています。

**荒川**　強化々々といっても、いわゆる技術がうまいだけではなくアマチュア選手として当然備えていなければならないマナーの問題もあるし、中沢君のいった予算という問題も大きい。

一つの決められたワクの中でおさめるというのではなく、プランにそったワクを考え出すといった巾のある行きかたで、これからは歩んでいこうと思う。

私自身としては、やはり指導者の養成、全国各地から優秀選手を集めた試合などを行って日本がいかにしたら体格の秀れた外国チームの壁を突き破るか考えたいと思っています。

幸い、最近のデーターでは、日本のハンドボール人口の八割強が高校生以下の若い世代ということなので、将来への希望は大いにあるものと確信しています。

今回の西ドイツ招へいは、そうした目標に進むスタートとしては、まずまずの成果をあげ得たものと思っています。男子3勝、女子5勝ということにおごることなく、問題点を拾い出し謙虚に反省すべき態度を忘れなければ、むしろ上々の成果を得た今回のシリーズであったと考えます。

——ユーゴ、フランスなどから来日の希望が伝えられているとも聞いていますが、こうした国際試合を機に一つ一つ着実な発展をとげられるよう願ってやみません。どうも皆さん、長いあいだありがとうございました。（9月28日・体協401号室で）

## デュエル選手訪問

今春スウェーデンで開かれた第6回世界7人制選手権に出場し、ホルスト（デンマーク）らと並び優秀GKの折り紙をつけられたH・デュエル選手は来日メンバーのなかでも、もっとも注目を集めた一人だ。体育大学を出て、いまは体育教官をしているという彼だが、わざわざ持参したバンジョーのひきうたいは玄人はだし。甘い声を毎夜宿舎で鳴らしていたものだ。彼とのインタビューは〝音楽〟からはじまった……。

——唄がとってもうまいんだってね。

『それほどでもないけど、大好きなものの一つだ。特にジャズはいい』

——日本に来て聞きに行った？

『そんなヒマはなかった。TVで音楽番組をちょっと見たのと、ホテルでレコードを聞いただけ』

——ところで、本職（?）の話を聞きたい。日本のGKの印象は？

『非常に動きが速いし、うまい。福本（大崎電気）はなかでも印象に残った。彼ならヨーロッパのどのGKにも劣らない』

——目についた弱点があったら教えて欲しい。

『ほとんどの日本のGKは、7MTに対して定位置にいるが、前に飛び出すべきではないか』

——日本の攻撃はどうか

『速いという一語につきる。よくまあ、あれだけ動けるものだ。選手としては木野（立大）、近藤（大崎電気）とあと二、三人名前は忘れたがよい選手がいた。木野、近藤はすばらしい』

——日本をどう感じた？

『近代的な国だ。それとこれはハンドボールに話なるが、日本はトレーナー（監督、コーチの意）のパラダイスだ。このまま日本に残ってどこかのクラブのトレーナーになりたいとさえ思う』

——どうしてそう思う

『選手たちは試合が終ってしまってもトレーナの云うことを聞くし、低姿勢だ。トレーナのかばんを選手が持ってやっているのをどこかで見た』

——ところで、将来の目標は。

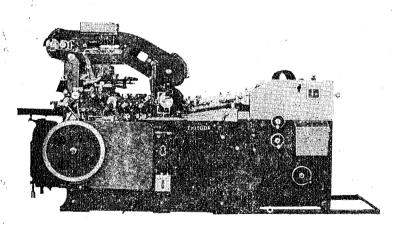
『オリンピックまで、西ドイツのレギュラー・ポジションを守りたい。そのためには節制することだ』

それまではニコニコと笑いをまじえて答えていた彼が、この質問の時だけは、えらくかしこまって返答してくれた。

今回の来日では、再三腹痛に悩まされベスト・コンディションでなかったことを、彼は悔やんでいたそうだが、それはナショナル・プレイヤーとしての自覚というよりも誇りがそうさせるのだろう。

バンジョーをひき、ポーカーがめっぽう強く甘いマスクをした外見プレイボーイ的な彼だが、来日中になかよくなった北村尚英君（大崎電気）が煙草をすおうとしたのを見つけると大声を出してこう云ったそうだ。『君はナショナルプレイヤーじゃないか。そんなものすっちゃいけないよ…』

# ロングシュートの練習を十分に

訳　藤本　強
（日本協会常務理事）

先号まではハンドボールの基本の基本ともいうべき、投・捕・跳・走について触れてきた。

今号では、これらを基礎において、ハンドボールで勝つためにはぜひともマスターしなければならない技術――シュート――について触れていくことにする。

7人制ハンドボールでは、従来の11人制ハンドボールに比べて、非常に多彩なシュートが見られるようになった。特に数多くのヨーロッパ遠征、ヨーロッパチームの来日に刺激されて、我が国の技術も年々進歩しており、本場のヨーロッパも驚かせるような多彩な技術が駆使されている。

ディフェンス面の進歩もこれに一層拍車をかけ、スピード、身のこなしもより磨きをかけられ、トップレベルの技術の向上には眼をみはらせるものがある。ここでは、シュートを基本的ないくつかの類型にわけ、とりあげていきたい。

☆　☆　☆

ハンドボール競技の中でもっとも重要な技術はシュートである。得点はシュートなしには考えられない。

スピード、正確さ、モーションの早さが個々の重要な要素となって、シュートが組みたてられている。国際選手ともなれば、これらのどれをとつてみても、すぐれた技術をもっている。

7人制ハンドボールにおいては、チームの全メンバーがシュートがちゃんとうてることが必須の条件となってくる。理想的に云うならば、全選手がロングであれ、サイドからであれ、ポストからであれシュートが決められることが必要である。

シュートは次の三種類に分けることができる。

**1、ロングシュート**
（10～12メートル離れた位置から放つシュート）

**2、サイドシュート**
（サイドの20度前後の位置から放つシュート）

**3、ポストシュート**
（ゴール前6～7メートルの位置から放つシュート）

以上はゴールに対する距離もしくは角度はよって分類したものであるが、シュートする体制から、さらに細分して示すことにする。

（写真は西独第1・3戦より）

## 1、ロングシュート

各チームともぜひともマスターしておかなければならないシュートである。単に得点をあげるだけでなく、ディフェンスを前に出しポストから、サイドから多彩な攻撃をするためにも、ぜひとも決められるように練習しておかなければならない。このシュートの成否によって、戦術的におおいに異ってくる。あるチームは、このシュートだけで、全得点をたたき出しているチームもある。

### イ、ステップシュート

（写真①参照）

このシュートはまたの名を右左右シュートとも呼ぶ。シュートの中でもっとも基本になるシュートである。パスの中でもっとも基本的なショルダーパスと同様に一番基礎になるものであり、十分練習をつむ必要がある。

シュートの方法は基本的にはショルダーパスと全く同一である。

右足に体重をかけておいて、左足を踏みだし、体重を左足に移しながら、ボールを投げる。これが基本になる。右足を踏みだしている時にボールをキャッチし、続いて左足を踏みだし、シュートをし、右足がついていく形が足の運びとしてはもっとも自然である。

この時、体の向きは走り、もしくは投げる方向に向け、腰のひねりをも加え、ボールに加速する。投げおわった時には体は正面を向く。手および指は正しく投げた方向にフオローするようにする。

肩の高さから出すシュートがもっとも基本であるが、手を十分に伸ばして、頭の真上から、腰の高さから、あるいはひざの高さからもシュートすることができる。

これら投げる位置の高低の変化

は実戦の場合、非常に重要になってくる。バックを置いてシュートする場合には、この高低の変化をつけなりと、いたずらにバックにカットボールを提供するだけになってしまう。

またボールのコースについても、どの体制からでも、どこにでも投げられるように十分練習しておくことが重要である。

このシュートは基本的なシュートであるが、キャッチしてすぐ投げる技に習熟した場合実戦において非常に有効なシュートになる。

このシュートは良く練習をつんだ場合には、他のどのようなシュートよりも、キャッチしてから短い時間でシュートすることができる。このモーションの速さは、バックのホンのちょっとしたスキをつき、またキーパーに構えるひまを与えずにゴールを割ることがしばしばある。しかもバックを前にしてうたれると、キーパーにとっては死角となり、思いもよらぬところからボールが出てくることが多い。

基本的でありながら、きわめて実戦的な技術であり、初心者からベテランに至るまで、十二分の練習をすることが望ましい。

**ロ、ジャンプシュート**　（写真②参照）

バックを前において、そのバックの頭の上から打つ、10メートル前後のジャンプシュートは試合の時には、非常に重要な得点源となっている。

このシュートは右利きの選手では、左サイドから右に向って、斜めのコースを走り、右足が前に出た時にキャッチし、ジャンプの準備をしながら左足を踏み出し、軽くまげる。しだいに左足に体重をかける。

右ひざを軽くまげ、右手は出来るだけ高くあげる。そして強く左足によって踏み切る。

左肩はデイフェンスから、ボールと体を相手から護るような形をとる。

しかし、この際決っして左肩を相手に接触させてはいけない、右肩はできるだけ、左肩が前に出るような形をとる。

ある選手はシュートをするかのようなフォームをし、相手をフェイントにかけ、ドリブルして抜いていくことをよくする。これを重要な技術である。

**ハ、横への倒れこみシュート**　（写真③参照）

7人制ハンドボールによって開発されたシュートである。狭いデイフェンスの間をぬって行なうシュートである。

このシュートはプレイ中にも行うか、同時にフリースローの際にも、多く使われる。

右利きの選手の場合、まず右からシュートするフェイントを行ない、バックを右によせるか、そのままの位置に釘づけしてしまう。そして、体を左に傾け、手は頭上にもっていき、その位置からボールをシュートする。体は投げた後は左前に倒れこむ。

デイフェンス側がフェィントによって大きく右に動いている場合には、体はやや左傾する程度ですむが、そのままの位置にいる場合には、体を思いきって左にまげ、体が水平になった瞬間に、ボールをシュートする。この水平になった瞬間をつかみさえすれば、ボールはまちがいなく、デイフェンスの右側を通り、ゴールに到達することになる。このシュートは7人制ハンドボールにはなくてはならないものである。

このほか、ロングシュートとしては、バックハンドシュートが時折使われるが、主なのは、先述の三つである。いずれも十二分の練習が必要である。

連載・リレー寄稿

# 日本ハンドボール界の課題（5）

## ～三十周年を迎えた球界に望む～

鶴岡久雄
（高知協会理事）

光陰矢の如し、過去において紆余曲折があったが、ここに我がハンドボール界も三十周年を迎え諸兄と共に御同慶にたえない。

人間二十才で成人式三十才ともなればあぶらも乗り仕事に対する旺盛な意欲と絶大なエネルギーに満ち溢れた年令でもある今年こそハンドボール界にとって一層の躍進の年であることを祈り乍ら筆を取ります。

思えば敗戦になり急に支えを失った私達は心の糧として二度と帰り来ぬ青春をこのハンドボール競技で送った。先輩の残してくれた数個のドス黒いボールを数少ない部員と共に「我々の魂はこれだ」とボールを追かけ暗くなったグランドで汗と涙の練習もつい昨日のように思われる。疲労のあまりに無言で芝生に臥て時を忘れたことも今では楽しい思出の一つである。こうした一見単調な生活が日曜祭日、休暇を問わず二十余年を過ぎ尚続こうとしている、この小さなボールに接することにより斯道の先輩後輩そして教子と人間関係は何ものにもまして貴重な価値あるものと感謝している。恵まれている現在の青少年諸君も安易な面での妥協を避けこのハンドボール競技を通して技術もさることながら人間完成へと努力の手綱をゆるめることなく精進し全ての人々よりハンドボールマンは紳士の折り紙をつけられることを強く希望するものである。

十六米五十糎のオフサイドラインがノーラインとなり更に三十五米ラインと変更された、そのつど技術が歩一歩と前進し一九六一年に男子翌六二年には女子が晴の国際舞台を経験し一躍日本のハンドボール界は目指ましい向上発展を見せ北は北海道から南は沖縄の果まで全国津々浦々にまで普及されたことをハンドボール愛好者と共に喜びたい。でもこれで満足すべきではない。スポーツ界は日進月歩休むことを知らず、むしろこれからがハンドボール界にとって茨の道になり本部協会はもとより諸先輩や指導の任に当る方々の各面に渡る指導手腕に期待するところが大である。

誕生したばかりの地方では小さな生命が今にも消え入りそうに博動を続けている。本部協会の発足史をみてもその苦労が忍ばれる陸連の借家住いで少数の先輩諸兄が手弁当で寝食を忘れ滅私的努力の結果現在に至った。地方においても同様経済的に時間的に余裕がなく本務をもつ教員の片手間の仕事にしてはあまりにも荷が重過ぎる。上司には小言、認識の薄い父兄からは白眼視され、家庭からも苦言の連続、ただ愛する教え子の成長を信じればこそ明日への希望がつながれ、滅入り勝ちな気力も湧き出るもの。本部協会もこうした地道な地方の指導者に暖い指導助言を与えて欲しいものである。

何ずれの県でも又何時の時代でも同様高校チームを中心として普及してきた。その土台となる中学校教材にハンドボール競技が除かれたことは全く致命的打撃である、高校新入生にハンドボール部への勧誘が如何にむつかしいか、尚チーム結成には二・三年を要する。陸上、バレー、バスケットボール等他種目は中学時代になじみ深いので随分多人数が入部する。だがことハンドボールとなると手を使用するのか足で操作するのか皆目知らず他部に入部する新入生を横目でみながらズブの人に、しかも一、二年の短期で成長さすのは並大抵の苦労ではない。ハンドボール競技の普及発達には色々と問題があろうが、中学校教材にハンドボールが入っていないことが地方発展の最大の隘路であると云っても過言ではあるまい。ハンドボールは走・跳・投と極く初歩的なスポーツ基本の組合せであり、やって面白く見て楽しい競技である、バスケットボールに似ているが平易で導入しやすい競技であり中学校教材に最適の種目であるのに文部省はこれを採択しない。何故か疑問である。この筋の権威者はもとより本部協会も中学校教材にハンドボール競技が採択されるよう協会面より強力な復活運動を展開するのが最大の急務であろう。

経済面においても他種目より支出が多くこれも問題だがこれは理解が出来、地方の協力態勢も整っているが、今一つ考えなくてはならぬのは指導者不足の解消であろう。殊に今年は去る九月東京でコーチ講習会が催されたがこうした研究会をブロック別に行い、底辺拡充の意味からも地方の発展に今少し視野を向け惜しみなき愛の指導を差し伸ばすことを切に希望する。

# 成果あげた多範囲な指導

## 初の公認コーチ講習会終わる

斯界はじめての試みとして、その成果が各方面から期待されていた「昭和42年度ハンドボール公認コーチ講習会」は9月25日から29日まで東京・駒沢屋内球技場を会場にして行われた。

講習会に参加したのは全国8ブロックと3組織から推せんされた30名（氏名後掲）であった。

第1日は開講式につづいて、日本協会・荒川清美理事長が国内外の情勢について解説、このなかで『ミュンヘンオリンピックの出場国（男子）は、一九七〇年の第7回世界男子7人制選手権でその一部が決定される可能性がある。オリンピック強化はこの年を目標にしなければならず、あと3年のゆう予しかない。女子の参加については、来日中の西ドイツ役員の言によれば見通しは明かるい』と述べて注目された。

村田講師（右から二人目）の実技指導の説明を聞く受講者右端は徳永日本協会普及部長

午後は東京教育大学・阿久津邦男教授によって講議「運動の生理」田村紡監督・宇津野年一氏（日本協会普及委員、名工大助教授）により研究発表「競技会の出場に備えて行う合宿練習における選手のコンディションの変動について」がおよそ2時間にわたって行なわれた。

第2日は実技指導を中心とした講習が行われ、男子については村田弘、勝繁夫、女子については北川浩、細井操（何れも日本協会技術委員）の各氏が担当した。

第3日は、村田、勝両氏による実技（総合技）指導と、安藤純光（日本協会審判部長）、佐野和夫（日本協会技術・審判委員）の両氏によって審判部門の講議と指導が行われ閉講した。

**受講者名簿**

岡田豊夫、石切山稔治、新橋満（北海道）、増田学、森恭一（東北）、金原至、青木崇、富祐彬、西島喜代治（北信越）山野圭三、遠藤健次、磯部浩、北原紀孝（関東）石野誠、渋谷行康（東海）、木村吉延、中井泰彦、岡田茂夫（近畿）川崎秀雄、越智武（四国）、柳井文治、辻一義、藤田信義（中国）島田秀四、荒木時弥、今村孝一（九州）嶋田新太郎、小袋是郎（全国高体連）、田中秀夫（全日本学連）大迫末次（全日本実業団）＝以上30名。

# 公認コーチ講習会に出席して

藤田信義

今回初めて公認コーチ講習会が開催されたが、これに出席して、との希望なので私なりの感想を述べる。旅費を支給し、全国より指導者を一堂に会したことは今までになく、大変な進歩で、受講者も何かを得ようと誠に真剣そのものであった。特に今回は各ブロックより3名の参加であったが、今後、もし許されれば各県より1名の参加が実現できたら、日本協会と地方協会のタテのつながりは一そう密になり講習会内容以上の収獲をともに得ると確信する。資金的な裏づけの確保と実現を望む。

**講習会の内容について**

参加者の立ち場上、多少意見のある人もあったが、第1回としては成功だったと思う。

荒川理事長のこれからのハンドボールについても、また色々の統計的データーをもとにしてのシュート経過、あるいはシュートの分析なども興味深く、統計的な分析の必要性を痛感、阿久津先生の「ハンドボールの基礎的選手づくりの運動生理学的問題」についてはコーチとして必要な基礎的なもので、特に現場での科学的研究方法は「科学は分析し、コーチが統合する」という意味あいからも、今後の研究に非常に参考になった。

全日本女子コーチの宇津野先生の「競技会の出場に備えて行なう合宿時のコンデイションの変動について」の研究発表もコンディション調整はコーチとしての問題点で立派な論文であった。もし許されれば田村紡のトレーニング計画、苦心談も聞きたかった。

全日本男子コーチの村田先生のハンドボールの基本技……パス、キャッチ等より応用技の説明は世界選手権に参加されての各国のプレーをみての卒直な意見も入り、また実技でのボールを扱っての準備運動やトレーニングはなかなか興味があり、受講者もひと汗かき、誠に和やかだった。

勝先生の「立教大のセット・オフェンス」は初めての公表だけに大いに参考になり、ギリギリのパスやステップシュートの重要さを再認識させられた。

次回には人の動きを主とした攻撃の第一人者・芝浦工大のオフェンスや立教大、大崎電気などのディフェンスも8ミリフイルムや16ミリフイルムを使って指導をし、日本全体のレベルアップに一役かって欲しい。

細井先生の「高校女子選手のパワーについて」は現場での経験発表でむずかしい女子選手のトレーニング方法であり、実になる立派な内容の講議だった。

北川先生のドッチボール、ポートボールからハンドボールに入る段階指導、特に変形ポートボールは実際に行っても面白く、現場指導に大いにプラスになった。

審判技として、安藤、佐野両先生の審判技のレベルアップ、判定の一貫性なども、公認審判員ばかりの受講なので新審判部の方針も理解できたと思う。

講議の日程を終えたあと、西ドイツ―全日本のゲームの観戦した。一九七二年のオリンピックをめざして全国一丸となり、普及に、究の緒をしめなおし、レベルに大いに頑張ろう。終りにのぞみ講師の諸先生がたの熱心なる指導に対しあつく御礼申しあげます（山口協会理事長）

# 秋のシーズン幕開く

## 早大、各部門に快勝
### 対慶大定期戦

秋のシーズン開幕を告げる伝統の第15回早慶定期戦は両校7勝7敗のあとをうけて9月7日午後1時30分から東京・早大記念会堂で行われた。

現役戦は両校応援団をはじめおよそ千人の観衆の盛んな声援のうちに進められたが、早大が立ちあがりのリードをうまく活かして後半の慶大の反撃をおさえ3年ぶりに勝利を飾った。なお高校、OB戦も早大勢が勝った。

▽高校戦（第9回）

早大学院 16（7—1、9—4）5 慶応

早大学院は5連勝。対戦成績は早大学院の7勝2敗。

▽OB戦

稲門ク（早OB）26（16—12、10—3）15 三田ク（慶OB）

稲門クは2連勝。対戦成績は三田クの7勝5敗2引分1中止

▽現役戦

早大 23（12—10、11—6）16 慶大

| 得 | 【慶大】 | | 【早大】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | 山田 | GK | 綿貫 | 0 |
| 6 | 古村 | FP | 水口 | 5 |
| 3 | 川上 | | 籏野 | 2 |
| 3 | 峯村 | | 朝日 | 7 |
| 1 | 田中 | | 萩原 | 7 |
| 2 | 小椋 | | 森田 | 1 |
| 0 | 植村 | | 杉山 | 1 |
| 1 | 川島 | | 鈴木博 | 0 |
| 0 | 尾崎 | | 小島 | 0 |
| | | | 伊藤 | 0 |
| 16 | （1） | 7MT | （1） | 23 |

（主審　勝）

## 各地の記録（寄稿歓迎）

### 全秋田和洋が初優勝
#### 男子は東北学院OB

第20回東北選手権は9月7日から10日まで青森県営体育館に東北6県の代表が参加、国体予選を兼ねて開かれた。

男子は、今シーズンも東北学院OB（宮城）が地力を発揮して全勝、TGク時代から通算5年連続優勝を飾った。

女子は、最近2連勝の三菱鉛筆（山形—神奈川）が転籍したためクラブチームの優勝争いとなったが全秋田和洋（秋田）が全岩手をおさえて初優勝した。この大会で秋田代表が優勝したのは初めて。

### 高校女子で八郷優勝

▼茨城県民総合体育大会（10月・土浦工）

▽一般男子準々決勝

全竜ケ崎 不戦勝 日立製作所

水戸市 34—7 東洋運搬

自衛隊勝田A 28—15 土浦市

原子力研究所 16—8 自衛隊勝田B

▽同準決勝

原子力研究所 25（13—2、12—5）7 全竜ケ崎

自衛隊勝田A 34（18—3、16—3）6 水戸市

▽同決勝

自衛隊勝田A 28（12—9、16—7）16 原子力研究所

▽高校男子準決勝

石岡一 17—7 土浦工

麻生 29—5 水海道一

▽同決勝

麻生 19（10—2、9—1）3 石岡一

▽高校女子準決勝

水海道二 17—8 磯原

八郷 9—8 麻生

▽同決勝

八郷 8（3—2、5—2）4 水海道二

▽中学男子決勝

千代田 20（11—11、9—7）18 新治

▽中学女子決勝

結城 13（4—3、9—4）7 新治

### 竜ケ崎で市選手権開く

茨城県・竜ケ崎市に結成されている「竜ケ崎市ハンドボール同好会連盟」はこのほど茨城協会の後援で第1回竜ケ崎市総合選手権（9月24日・竜ケ崎一高）を開き男子は12チームによる優勝争いの末、東洋運搬機Aが平畑クを破って1位となった。女子は市内東西対抗として行われ引き分けた。

▽男子決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）

東洋運搬機A 22—15 竜ケ崎教員

平畑ク 15—11 流通経済大

▽同決勝

東洋運搬機A 23（11—8、12—10）18 平畑ク

▽女子東西対抗

東軍 4（2—1、2—3）4 西軍

### 池袋商女子、全勝で優勝

新発足の東京・城北連盟では9月15 16 17の3日間、井草高で秋季城北地区高校リーグ戦を開き、男子は赤羽商、女子は池袋商がそれぞれ1位となった。

▽男子順位①赤羽商4勝1敗②北園3勝2敗③帝京商工2勝2敗1分（得点率〇・四九）④練馬2勝2敗1分（〇・四三）⑤井草⑥池袋商

▽女子順位①池袋商4戦全勝②井草3勝1敗③赤羽商2勝2敗④鷺宮⑤練馬

# 第20回東北高校

第20回東北高校選手権は9月7日から10日までの3日間、青森県営体育館に東北6県の代表男子12校、女子9校が参加して開かれた。

男子は進境いちぢるしい大石田（山形）が、準々決勝で2連勝を狙う盛岡一（岩手）を破った余勢をかって堂々の初優勝を飾った。この大会で岩手、宮城以外の代表が優勝したのは初めて。

女子は予想通り、全日本高校1位の花巻南（岩手）が、安定した攻守で勝ち進み初優勝した。この大会の女子で岩手代表の優勝は初めて。

なお、この大会をもって、今年度の全国ブロック高校選手権は全部終わった。

▼男子1回戦

大石田（山形）12―6 南会津（福島）
塩釜（宮城）16―11 秋田南（秋田）
古川工（宮城）14―6 岩手（岩手）
聖光学院（福島）25―14 東根工（山形）

▽同準々決勝

大石田 15（8―4 7―3）7 盛岡一（岩手）
塩釜 20（8―5 12―9）14 鰺ヶ沢（青森）
古川工 15（7―3 8―4）7 青森（青森）
聖光学院 21（10―6 11―11）17 湯沢（秋田）

▽同準決勝

大石田 10（3―2 7―2）4 塩釜
聖光学院 21（10―9 11―7）16 古川工

▽同決勝

大石田 19（9―4 10―9）13 聖光学院

▼女子1回戦（1試合）

古川女（宮城）11―2 竹田女（山形）

▽同準々決勝

秋田和洋（秋田）10（5―0 5―2）2 古川女
小高農（福島）14（7―5 7―8）13 花巻農（岩手）
涌谷（宮城）14（5―2 9―3）5 福島西女（福島）
花巻南（岩手）11（5―3 6―3）6 大曲（秋田）

▽同準決勝

小高農 12（7―5 5―5）10 秋田和洋
花巻南 9（6―3 3―2）5 涌谷

▽同決勝

花巻南 12（5―1 7―3）4 小高農

**昭和42年度ブロック高校選手権優勝校**

【男子】▽北海道 紋別北▽東北 大石田▽関東 明星▽北信越 上田▽東海 桜台▽近畿 洛星▽中国 宇部工▽四国 新居浜工▽九州 大分東

【女子】▽北海道 室蘭商▽東北 花巻南▽関東 深谷女▽北信越 小諸商▽東海 名古屋女商▽近畿 精華女▽中国 山陽女▽四国 新居浜商▽九州 大分東

# 地方協会告知板

## 30才以上の大会
### 愛知協会の新企画

愛知協会では、かねてから検討を進めていた30才以上のプレーヤーによって編成されたチームによる大会を実施することになり、第1回大会を10月31日、11月1日の2日間、名古屋・金山体育館で午後6時から開く。

## 京都理事長に入江氏

京都協会ではこのほど新役員を次のように決め発表した。

▽会長 木下弥三郎（丸玉観光KK社長）▽副会長 玉城修▽理事長 入江平三△理事 小西博喜 福井善昭、岩本定男、藤本昇、末政断夫、宮本修、中村貢、田中登司治、吉田博二、藤林治雄▽会計担当理事 藤岡裕子

## 東京城北連盟が発足

東京都・城北地区ハンドボール連盟がこのほど発足、その役員が発表された。

同連盟の傘下は東京北、板橋、練馬、豊島、文京の5区。連盟活動として春季選手権、秋季リーグ招待試合などが予定されている。

▽会長、宮田豊太郎（都立北園高校長・全国高体連ハンドボール部長）▽副会長 天野敏雄▽常任理事 本堂元規、大門正男、奥田恒夫

## 福井大と信州大
### 北信越学連に加盟

北信越学生連盟に、このほど福井大、信州大（長野）の二校が加盟、同学連は5校のリーグ戦を組むことになった。

## 東北大、まず勝ち名のり
### ―学生界秋季リーグ―

秋の各地学生リーグ戦は、10月14日北海道大で開かれた東北・北海道学生選手権を緒戦として、関東、関西、東海などが相ついで熱戦の幕をあけた。

東北・北海道学生（10月14・15日北大）は東北学院大、東北大、岩手大の東北勢3校と北大、釧路教育大の北海道2校の合計5校によるリーグ戦で行われた。

優勝は、春以来、顔合せのたびに激戦を展開していた東北大と東北学院大の両校が全勝で対戦、東北大が押し切って昭和37年秋以来久々の優勝（2回目）を飾った。

## 国体に沖縄（高校女子）参加

日本協会では、国体高校女子の部に沖縄代表として小禄高が参加すると発表した。国体ハンドボールに沖縄のチームは初出場。

## 全国評議員会開く

国体時慣例の全国評議員会は10月23日、埼玉県浦和市の「小島」で開かれ、当面する国内、外の課題について協議が行われた（次号詳報）

# 編集後記

○…今号も先号に引き続き西ドイツ特集にしました。記者クラブの方々の肝入りでまた新鮮な原稿で誌面を飾ることができたのは、大変幸です。

○…気になることがあります。一つはルール解釈のことです。IHFから送付されてくるルール、文書とは異った解釈をドイツ側がもっていることがいくつかあり、これもIHFにはっきり聞かなくてはならないことですが、どうしてこうした食い違いができているか大いに問題になりましょう。もう一つは今回来日したチームの平素の実力がどのへんにあるかということです。"夢の旅行"という唱い文句が西ドイツの雑誌には出ています。日本チームが遠征した場合とはかなり違っているのでしょう。秋のシーズンです。実力を養いましょう。（T・F・）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第四十八号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十二年十月二十五日印刷 昭和四十二年十一月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 鈴木達雄
定価百五十円